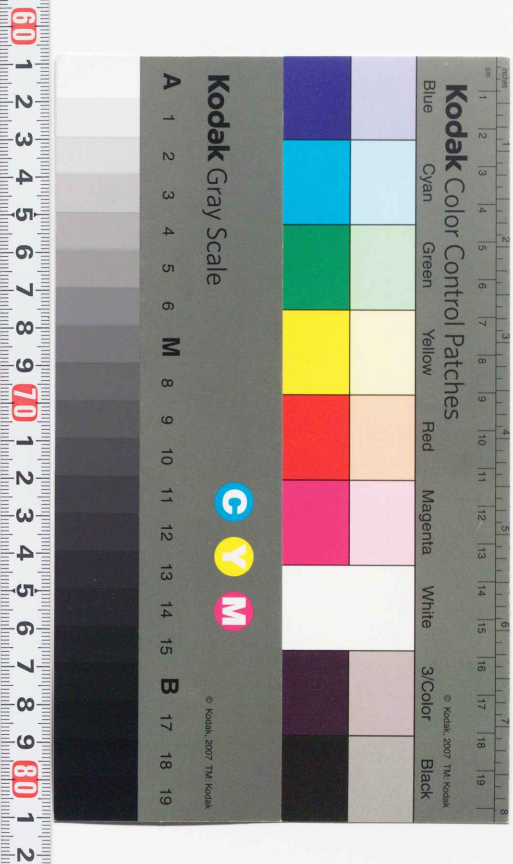


かかみがはら ふるさとめぐり

—歴史と伝説の地をたずねて—



各務原市教育委員会



かかみがはら ふるさとめぐり

—歴史と伝説の地をたずねて—

表紙

村国産子ども歌舞伎

序

私たちの住んでいる各務原の地には、いつごろから人間が住み始めたのでしょうか。また、現在までの祖先たちの生活の足跡は、どこに、どのように残っているのでしょうか。こういう疑問は、父祖の代からこの地に住みついていた人々はもちろんのこと、最近になって当地に移り住むようになった方々にも、共通して、極めて関心の深い事だといえます。

しかし、興味があっても、道端の石地蔵や、本道からやや奥まった所に、ひっそりと残されている先人たちの足跡は、案外見落しがちなものです。

この本は、市民の皆さんに各務原をさらによく知っていただく目的で、原始の時代から現代までの文化遺産を対象に、市内めぐりの手引き書として編集したものです。市内には、ここで紹介した何倍もの文化遺産があり、この本ではとても紹介し尽せないほどたくさんあるのです。けれども、この本を片手に市内めぐりをしていただければ、本に載っていない文化遺産に気付いてい

ただくこともできるでしょうし、身近な場所に先人の足跡をみつけ出す目もしらすしらすの内に身に着けていただくことができると思っています。

現代に生きる私たちは、先人の残してくれた文化遺産を大切に保存し、そのままの姿で次の世代へと残し伝える責任があります。そのためには、市民の皆さんに文化遺産に対する理解を深めていただく必要があります。この本の発刊の意義もそこにあります。

今回の増刷(第三版)を機会に、新しい学問的成果をとり入れて大幅に改訂をいたしました。この書物が、市民の皆さんに郷土の歴史や伝説に触れる機会の一つとして利用されることを願っています。そして、先人が郷土を開拓し、長い歴史を生きぬいてきた努力と英知に接し、ふるさとを愛する心を育て未来への創造性の糧とされることを望んでやみません。

昭和六十一年七月

各務原市教育長 水野定之

も く じ

第一コース 旧中山道と古墳をたずねて

道案内図	一
貞照寺	三
うとう峠の一里塚	五
金繩塚古墳	六
中山道鶴沼沼	七
芭蕉の句碑	八
二宮古墳	九
狐塚古墳の石棺	一〇
衣衾塚古墳	一一
空安寺	一二
坊の塚古墳	一二
八幡神社	一四
大牧古墳とふな塚古墳	一五

歴史民俗資料館

薬師寺	一八
山下古墳群	二〇
新加納小休本陣	二〇
少林寺	二二
手力雄神社	二三
柄山古墳	二九

第二コース 歴史のあけぼの

—— 炉畑遺跡をたずねて ——

道案内図	三三
前渡不動	三五
炉畑遺跡	三七
炉畑周辺の遺跡	四三
民家「旧桜井家」	四五
金山寺	四八
山田寺	四九

飛鳥 五五
 第三コース めぐまれた自然と
 各務の舞台をたずねて

道案内図	六一
伊木城	六三
名勝木曾川	六五
城山	六六
村国真墨田神社	六七
大安寺川	六九
新池	七二
大安寺	七三
車折神社	七四
日乃出不動	七五
車洞古窯跡	七七
山中不動	七八
寒洞池	八〇

洞古墳 八三

稲田山・会本古窯跡群 八四
 各務の舞台(村国座) 八五

おがせ池 八九

第四コース 伝説の地をたずねて

道案内図	九三
金鳥塚のはなし	九五
大安寺の清泉	九七
芋が瀬池の宝刀	九九
赤ばし山の立岩	一〇二
とうもんやっこ	一〇五
うばがふところ	一〇九
ねずみ小僧といろは茶屋	一一一
西入坊の蛇骨	一一三
甚六屋敷	一一六
あわずのちようちん	一二〇

よめふり坂 一二三



第1コース
 第2コース
 第3コース
 第4コース

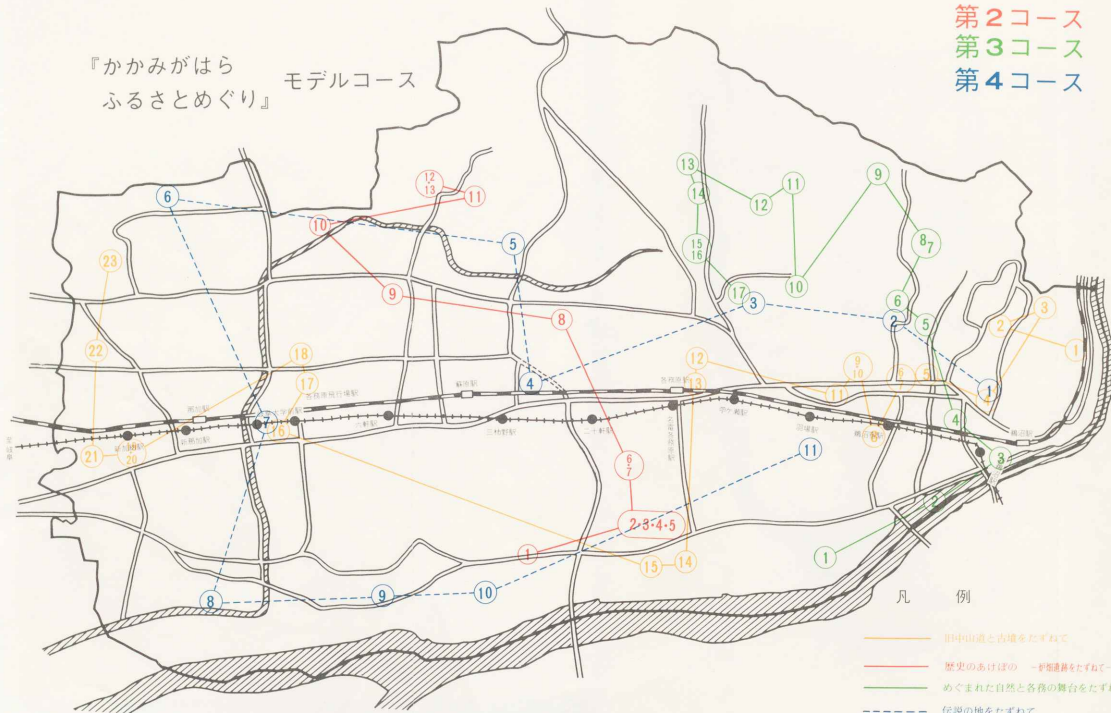


凡 例

- 旧中山道と内堀をたずねて
- 歴史のあけぼの 一歩相違をたずねて
- めぐまれた自然と各荘の舞台をたずねて
- - - 伝説の地をたずねて

『かかみがはら
ふるさとめぐり』
モデルコース

- 第1コース
- 第2コース
- 第3コース
- 第4コース



凡 例

- 旧中山道と古道をたずねて
- 歴史のあけぼの 一帯をめぐるとして
- めぐまれた自然と各々の舞台をたずねて
- - - 伝説の地をたずねて



貞照寺仁王門

え、その下に高山線
の第一トンネルがあ
り、西には新鶴沼沓
の団地が見えます。
貞照寺は、国道から
西へ五〇メートルほ
ど入った静かな所に
あります。

とがいったため、貞
奴はますます不動尊
を深く信仰するよう
になりました。そし
て、寺を建てたいと
思うようになり、年
をとってから、よう
やくその願いがかな

貞照寺の本堂



貞照寺

最初に訪れるのは、各務原市の東端、鶴沼沓積
寺町にある貞照寺です。ここは東に国鉄高山線が
通り、それと並んで国道二一号线がはしり、その
東にはライン下りで有名な木曾川が流れています。
北には高さ三三七・六メートルの陰平山がそび

最中に訪れるのは、各務原市の東端、鶴沼沓積
寺町にある貞照寺です。ここは東に国鉄高山線が
通り、それと並んで国道二一号线がはしり、その
東にはライン下りで有名な木曾川が流れています。
北には高さ三三七・六メートルの陰平山がそび

各務原市内を東西にとおっている旧中山道は、江戸(現東京)の日本橋をふりだしに、木
曾(長野)を通して美濃(岐阜)に入り、近江(滋賀)の草津で東海道に合流しています。
市内の中山道筋に残されていた松並木は、昭和一〇年代を中心に切り倒され、いまではそ
の面影も無くなってしまいました。また一里塚も新加納・六軒・山の前・うとう峠の四か所
にありましたが、いまではうとう峠だけになってしまいました。
中山道沿いの宿駅は美濃国全体に一六あり、それぞれの宿には、人や荷物を運ぶ馬を常設
する、「伝馬の制」がしかれていました。(こ)鶴沼宿もその一つに含まれています。また、新
加納には休憩用の小休本陣がおかれていました。
古墳では、特に泉下最大の円墳といわれる「衣裳塚古墳」や前方後円墳である「坊の塚古
墳」など、そのままの姿で数多く残されています。

このように、私たちのまち各務原市の中山道沿いには、先人が残してくれた数多くの文化
遺産があらにこちらにあります。ここでは、それらを訪ねて、先人の面影をしのぶとともに、
地域の移り変わりをみていきたいと思えます。

この寺は、明治・大正・昭和の三期にわたり、女
優第一号としてかつやくした、川上貞奴が昭和八
年に建てたものです。

貞奴は、本名をさだとい、子どものころから
信仰心のあついでした。養母の病気を治すため、
真言宗の成田不動尊に願をかけ、冷水をあびる。行
に励みました。すると、そのかいあつてか、養母
の病気はたちまち治つてしまいました。そんなこ



貞照寺 縁起館

って建てたのがこの貞照寺です。

しかし、そのころは新しい寺を建てることを認めなかった

時代でしたから、大変苦勞して寺を捜しました。やがて東京

別院大聖寺の末寺となりました。

年老いてからの貞奴は、ますます仏の道に勤めたということですが。貞奴が使った遺品などは縁起館などに展示され、お参りする人々が拝観できるところになっています。

貞照寺からうとう峠へ行くには山道がありましたが、道も急でけわしいため今では通る人も無くなってしまいました。そこで、貞照寺の西を北西に向かつて新鶴沼台にぬける道を行くと、左手に池があらわれます。それが合戸池です。

この合戸池は、ため池として使われていたものと思われませんが、山の斜面にあり、見晴らしもよく、昔中山道を通った旅人が疲れをいやした場所でもあったと思われます。今では住宅に囲まれ、静かに水をたたえています。

の南多摩郡小宮村にあった全休寺の寺籍を鶴沼の宝積寺に移し、国の許可を得て、金剛山桃光院貞照寺という寺号にしたのが昭和七年一〇月二八日のことです。

その後、本堂・鐘樓・仁王門・庫裡・手水舎・茶所・稲荷堂などを次々と建て、昭和八年一〇月二八日に本尊の不動明王を迎えました。そして、昭和三年に愛知県犬山市にある成田山名古屋

うとう峠の一里塚

合戸池を左手に見ながらしばらく行くと、右手に山へ向かう道が見えます。そこを歩いていくと、うとう峠の一里塚があります。

貝原益軒の「岐蘇路の記」によると、「うとう峠は長坂ともいふ」とありますが、坂が長かったのが長坂と呼んでいたのでしょう。むかしはこのうとう峠を通り、うとう峠を越えたと向こう側を乙坂といひ、坂祝町勝山へと通じていました。今



一里塚跡

はもう、その道はありません。このうとう峠に登りつめる辺りに、一里塚の土盛りが

残っています。

峠に向かつて左側の一基は、饅頭形の盛り土が完全に残っています。

高さ二メートル、直径一〇メートルあります。右側の一基は、戦時中航空隊がバラックの兵舎を建てたため、南側面が一部削り取られています。両方とも松や雑木が生い茂っており、この辺りは、眺めがよく、ハイキングコースとしても利用されています。

一里塚付近



ような一里塚は、この外に、各務山の前町と蘇原六軒町、那加新加納町にありましたが、現在は残っていません。

金縄塚古墳



金縄塚古墳

うとう峠を後にして南西に向かって坂をくだります。右手の住宅街とぎれ、畑が現われ、ここには金縄塚古墳が見えます。

この鶴沼東町にある金縄塚古墳は、後ろに山があり、周囲を畑にかこまれた、鶴沼一帯を見わたせる高台にあります。塚は、直径三七メートル高さ五・七メートルで、県史跡指定の衣衾塚古墳につく規模をもっています。江戸時代に盗掘された

といわれており、古墳の中央部は深さ一・五メートル直径一〇メートルの円形で掘り下げられ、そこに目通り(目の高さ)の木の直径四〇センチメートルほどのヒノキが生えています。この古墳が造られた年代は、出土遺物(古墳から出てきた物)が今に伝わっていないこともあって、詳しくは分かっていません。

掘り下げられたあとの石碑



江戸時代の後期に書かれた「濃陽御行記」によれば、古墳を掘ったところ金の縄があり、朱砂も多く出て、焼物の蓋もあったが、金の縄はたちまち砕け、それ以後、鳴き声を聞けば必ず幸せにな

るといわれていた金色の鳥も鳴かなくなったと伝えられています。

写真でも分かるように、盛り土の周りにはいくつかの穴が掘られています。これは戦時中サツマイモを入れるために掘られたものといわれ、直接古墳とは関係無いようです。

中仙道鶴沼宿

金縄塚古墳を後にして、中山道沿いに西へ向かうと、まもなく鶴沼宿に至ります。

美濃国中山道三一里(約二四キロメートル)の間には、一六の宿駅がありました。鶴沼宿はそのほぼ中央に当たります。鶴沼宿の町並の中心は西町で、本陣・脇本陣はここにありました。本陣は桜井家、脇本陣は坂井家(天保時代以降東町

の野口家)でした。本陣とは、大名や公家など、当時、特に高い身分にあつた人が泊まった旅館のことで、脇本陣は本陣が先客で差し支えて泊まらない時や、大名や幕府の奉行が本陣に泊まるとき、家老やその他の役人が泊まるために利用した宿のことです。これは、普通、一般客にも利用されました。

鶴沼宿の町通りは、幅が広く家並も発達しており、中央に大安寺川から取り入れた用水が流れています。

寛政年間に書かれたとされる「濃州御行記」によると、

西町八八戸のうち宿場内は二九戸で、こ

本陣 桜井家の門





鶴沼宿の面影をとどめる街道筋

のうち七戸が上旅籠屋、八戸が中旅籠屋、一四戸が百姓家であると考えられています。旅籠屋とは一般の人々の泊まる宿屋のことです。

鶴沼宿は鶴沼村の一部ですが、鶴沼村が尾州藩に支配されていたのに対し、鶴沼宿の方は幕府の道中奉行が支配していました。

本陣の跡地は、現在、桜井家と武藤家の敷地になっています。今の桜井家には、昔みられた庭半分と大きなモチの大木、尾張の殿様から贈られたという自然石の手洗い鉢などがあり、わずかに昔の面影を残しています。江戸時代（一六〇三—

芭蕉の句碑

八六七）には大変にぎわったこの宿場も、明治時代に入って中山道があまり利用されなくなったのにもない、すっかりさびれてしまいました。国鉄高山線・名鉄各務原線の開通によって、中心は鶴沼駅近くに移りました。

中山道鶴沼宿を

少し西へ行くと、右手に芭蕉の句碑がみられます。

「ふぐ汁も

喰へば喰せよ

菊の酒」

と刻まれています。

鶴沼宿にある芭蕉の句碑



二宮古墳

芭蕉の句碑のすぐ隣に、二宮神社があります。

宝暦六年にできた「濃陽志略」という本には、二宮神社のことが次のように書かれています。

「二宮神社、三尺四面、後藤若狹、押でんは長さ五間、鳥居は高さ十二尺五寸、間き八尺八分、社地は東西二十一間南北二十三間（一）間、約一・八メートル、一尺、約三十センチメートル（一トル）」

二宮古墳の入口



これは、佛師の松尾芭蕉が貞享五年（一六八八）に駒本陣を務める坂井家に泊まっていたとき、宿の主人の求めに応じて詠んだものです。

「ふぐ汁も」の句碑は、明治十五年（一八八二）ごろまで坂井家に在りましたが、その後よそへ移され句碑も壊れてしまいました。今在るのは昭和四〇年五月坂井家の跡に建て直したもので、それといっしょに「更科紀行首途の地」の石碑も建てられ、芭蕉が鶴沼に立ち寄った記念とされています。

また、芭蕉はこの近くの岐阜でも句を詠み、「おもしろうてやがて悲しき鶴舟かな」の句がよく知られています。

後藤若狹とは鶴沼

の村国真墨田神社の神職のことで、二宮神社の神主も兼ねていたことがわかります。

二宮神社は古墳が築かれていた丘の上に建てられた神社です。その古墳は、現在、石室が開いているだけでなく、それに通じる道(羨道)も削り取られた形で残っています。内部の石室は大きく、大部分が見られます。死者とともに古墳に入れた副葬品の種類は分かっています。

狐塚古墳の石棺

中山道を後にして南へ行きます。名鉄鶴沼宿駅を通り鶴沼第一小学校の西方約一〇〇メートルの所へ行くと、狐塚古墳の石棺があります。

ここ鶴沼西町四丁目にある狐塚古墳は、各務原台地を東へ下りた平地にあります。現在はその面影を

残してはいませんが、直径一〇メートルほどの円墳であったと考えられています。

以前、石屋の人が古墳の石を買って掘り探ろうとしたところ、石室がみつかり、石棺も入っていることが分りました。石棺は長さが一・九三メートル、幅〇・八二メートルで屋根形のふたをつけた家形の石棺です。棺の深さは、底が土に埋もれているため、詳しくは分かりません。

石室は残っていませんが、石棺の石材は凝灰岩です。同じ石が木曾川の対岸にあたる善師野辺りで採れていることからみて、川を越えて運ばれた

狐塚古墳の石棺



ものと考えられます。川は、自然が作っている境界とみられがちですが、文化を伝える大切な道であったとみただけがよいかも知れません。

衣裳塚古墳

中山道を西町から羽場町へ入ると、まもなく右手に空安寺が見えます。その入口の右隣に、こんもりとした塚があります。それが衣裳塚古墳です。

この円墳は、直径五二メートル高さ七メートルあり、現在界内に残っている円墳中最大のもので、古墳の東方および南方の一部は、削り取られて寺院の境内となっていますが、その他のところは完全に元のままで、掘り起こされた様子はありません。

この衣裳塚古墳の東隣に、一輪山古墳という、

直径九メートルほどの小さな円墳がありました。

今から四〇数年前にこの古墳を崩して畑にした時、直径二一・八センチメートルの三角縁波文帯四神二獸鏡が土の中から出て来ました。この種類の鏡は、三世紀の後半、中国(魏)から伝えられたものとこれまで考えられてきましたが、伝えられたとされる枚数より多く発見されているところから、この考えに疑問を持つ考古学者もいます。

伝説では、この

古墳は坊の塚にまつられていた人の衣裳を埋めたもの

だとか、衣裳塚は一升(約一・八リットル)塚でむかし銀の小粒を一升埋

衣裳塚古墳



めたものどとかいわれています。衣裳塚古墳は、近くにある坊の塚古墳とともに、千数百年前に鶴沼地域を支配していた豪族の墓の一つだと考えられます。

空安寺

衣裳塚古墳のすぐ西に空安寺があります。この寺は真宗大谷派に属し光雲山空安寺といえます。縁起書によれば、昔、長岡千左衛門という人がいて、その人の長男千次郎という人が、一三歳で出家（僧になること）し、本願寺第八代御門跡の蓮如上人の直弟子となって諸国をまわるお供をしました。その時寺を建てるようにいわれ、山城国山科（京都市）から御本尊阿彌陀如来の御絵像をうけて、文明一六年（一四八四）に蘇原地内の寺島に

場農協辺りから南へ入ると、大きな小山が見えます。それが坊の塚古墳です。

この各務原古墳の東の端にある坊の塚は、後田墳としては県内でも大きい方で、全長一〇メートル、後田部の横幅は七メートル高さ一〇メートル、前田部の幅は六メートル高さ七・八メートルあります。

盛り土の後田部の東側には、幅一六メートル以上の堀のあとがあり、そのころの面影をとどめています。後田部の中心辺り、深さ約一・五メートルのところは石室がありました。今は掘り起こされてはつきりしていません。昔は古墳の盛り土に円筒地輪（土崩れを防ぐためなどに使われたとみられる土器）が立っていたといわれています。明治一九年と三五年ごろの二回にわたって調査が行われ、勾玉・管玉・白玉・石の弁などがでてき

空安寺を建てたと

いわれます。その

後小伊木に寺が移

され、天文三年

（一五三四）に、

再びこの羽場へ移

されて現在にいた

っています。

光雲山空安寺の門



この寺は今から約五〇〇年前に建てられたわけですが、正面の本堂ができたのは約二〇〇年前といわれます。境内もきれいに整っており、いわれの深いお寺の一つです。

坊の塚古墳

空安寺を後にして中山道沿いに西へ向かい、羽

ました。

この古墳についてはこんな話があります。

昔、村人がこの塚を掘り起こそうとしたところ、クワさきが古墳の石に当たり火花を出して、その飛火で付近の家が燃え上がり、折りからの強風で村全体が焼けてしまったということです。

このように、市内の古墳の多くには、古墳を掘ったら急に頭が痛くなったとか、体の具合が悪くなったなどの逸話が伝わっています。

これらの話が本当かどうか、そか分かりませんが、興味のある人でも勝手に古墳を発掘することは禁止されています。

坊の塚古墳の全景



八幡神社



八幡神社の狛犬

鶴沼中学校の南を西へ向かい、約一キロメートル行くと、山の前の八幡神社があります。途中から道が細く、込み入っており、やや分かりにくい

っています。大切に保存されていたらしく、阿・呼とも完全な姿で残っています。焼物製の狛犬が市内には、焼物狛犬の例として、このほかに、鶴沼古市場町の神明神社、鶴沼大伊木町の熊野神社など、二例が知られています。

八幡神社の狛犬はそのうちで一番古く、背中に「濃州各務村」

元禄十四（一七〇一）

己八月十五日」と銘が刻まれています。

ところですが、少し高いところに建てられていますので、上を目を向ければすぐ見つかります。

この八幡神社には灰稚狛犬があります。これは灰色の釉薬を使って焼いた狛犬の立像で、口を開けた「阿」と、口を閉じた「呼」の雌雄一対にな

八幡神社を後に南へ向かうと国道二一号线に出ます。そこを東におれて進むと、国道と国鉄高山線とが立体交差しているところへ着きます。国鉄各務原駅から東へ五〇〇メートルほどの場所ですが、ここに山の前一里塚があったといわれています。

す。しかし、これは、昭和二年六月二日の空襲によってできた穴をうめるために、盛り土を崩したので、今ではそのあとを見ることができません。

大牧古墳とふな塚古墳

国鉄各務原駅から国道二一号线を横断し南に下ると、まもなく名電各務原駅が見えます。その道をさらに南進すると、丘陵上に真新しい陵南小学校の校舎が見えてきます。小学校の校門をくぐってしばらく行くと、中庭があります。そこに大牧古墳（一号墳）があります。

これは直径約四〇メートル高さ約四メートルの円墳です。小学校の建設予定地に当たっていたため、昭和五十七年度に緊急発掘が行われました。市

内の古墳で本格的に発掘が行われたものの中では最も規模の大きいもので、石室も大へん立派です。発掘後、記録で保存し、古墳は取り壊す予定にないでしたが、文化財としての価値が高いものということで、学校の敷地内に残されることになりました。

大牧一号墳の西方約三〇メートルのところにはふな塚古墳があります。これは、現在、長さ約三八メートル、後円部の直径三〇メートルの高さ四メートルの前方後円墳です。ふな塚石室は後円部に作られることが多いのですが、この古墳では前方部から石室が

大牧一号古墳石棺





縄文土器 (左) と弥生土器 (右)

縄文土器は、縄文時代に比べて、高温で焼かれ、うす手

《弥生時代のもの》

弥生土器は、縄文

土器に比べると、高

温で焼かれ、うす手
には、もうい作りの
ものです。特に知
遺跡のものが多くあ
ります。

で、一目で石器と分かるものをはじめ、素人目には自然に出来た石のかけらと区別の付けにくいもので、いろいろな石器がならべられています。

《縄文時代のもの》

ここには、石を打ちかいて作った石器の外に、

石をみがいて刃をすどくした石器や縄文土器があります。

この土器は、表面に縄目の文様が付け

てあり、色は主にかっ色をしており、厚いわり

には、もうい作りの

ものです。特に知

遺跡のものが多くあ

ります。

《弥生時代のもの》

弥生土器は、縄文

土器に比べると、高

温で焼かれ、うす手

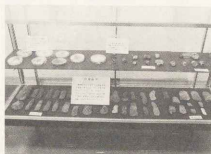
歴史民俗資料館

市役所とユニーの間の道を北に進むと、名鉄各務原飛行場駅の約五〇メートルほど南に、各務原市保健文化会館があります。この建物の二階の南側に歴史民俗資料館があり、石器、土器などが時代別に展示されています。

《先土器時代のもの》

ここには、土器が作られなかったころに使われていた石器が集めてあります。石を打ちかいて作った石器

市内から出土した石器



で堅く、底が小さくなっています。ものを切るために使われたと思われる鑿の破片もあります。また、この時代には、稲作も行われ、金属器も使われています。

《古墳時代のもの》

古墳には、前方後円墳、円墳、方墳などがありますが、市内では円墳が大半で、残りの何基かが

前方後円墳です。死者といっしょに古墳に入れた

副葬品には、鏡、玉、直刀、よろい、馬具、土

めに使ったといわれる埴輪(埴筒はにわ、人間、

動物、家)などがあります。ここには、栲山古墳

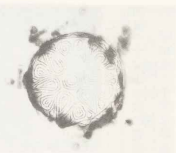
から出土した鶏頭埴輪が展示されています。

《歴史時代のもの》

市内須賀地区の古窯跡(古い窯あと)から出た

ものが、集められています。特に、須恵器の自然

釉は、千度以上の高温で焼かれたため、燃料の灰



大牧一号古墳出土の銀象嵌雲珠 (X線写真)

みつかりました。

後(四)部にも石室が

あったかどうかに

ついては、大半が

壊されていたため

不明です。

大牧一号墳もふ

な塚古墳も、鶴沼

地域の古代(五)家族の力を示すに十分な規模の造りであり、銀象嵌(銀をはめこんだ金工品)の馬具類

など、高い技術によって作られた副葬品も多く出てきているところから、当時の家族の力がしのべ

れます。大牧一号墳は六世紀末ごろ、ふな塚古墳

はそれよりやや新しい時代に作られたものとみら

れています。



土師器壺と自然釉のついた須恵器

展示されています。

このように先土器時代から平安時代までの世の中について、そのころ使われていたものの多くを目で見ることが出来ます。

薬師寺

市役所の北、各務原飛行場駅を北へ向かい、高



薬師如来坐像 (県重文)

ノキの寄木造で、眼は玉眼、くちびるは朱色で、そら豆状

のかたちをしており、顔ははげていますが墨で書いたひげが残っています。穏やかな顔をしており、眼や口の作風からみて鎌倉時代の仏師である快慶の流れをくむともいわれ、左手に薬壺を持っています。この本尊は、奈良の薬師寺に安置されていたものを、昭和二年四月に移したものです。

この薬師如来の下内側には、道弁という坊さんが貞和四年(一三四八)に造ったと書かれています。

また、同じく奈良の薬師寺から移された仏像に

が表面について、釉(うわくすり)を掛けたようになってきたものです。このほか、白鳳時代のものとして、山田寺跡や、平藏寺の境内から出た瓦などが

山線(やまのせん)を横切ってはじめての十字路を東(右)に向かうと、雄飛ヶ丘町の公園に出ます。その西側の道を北に進むと薬師寺に行きます。ここでは、いくつかの角度から、この寺をながめてみたいと思えます。

〈宗派と寺〉
この寺は、法相宗で、奈良にある薬師寺の岐草薬師寺別院として、昭和一三年に建てられました。その時は、講堂と庫裡(住職と家族の住む家)だけでしたが、二六年に鐘樓(伊勢湾台風でたおれた)、三九年に本堂、四二年に不動堂、四八年に山門という順で増築されました。

〈薬師如来像〉

本尊の薬師如来は坐像(すわった姿の仏像)で「ぜんぜん薬師」とも呼ばれ、多くの人々に信仰されています。本尊は高さ四五センチメートルの七

不動明王像があります。これは、昭和二四年五月に移されたもので、室町時代の作といわれます。薬師如来像は県指定、不動明王は市指定の文化財です。

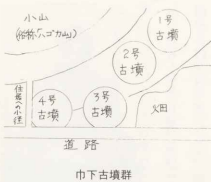
その外、那加西野町の弘法堂にあった弘法大師像と不動明王像も移まつられています。また、境内には、幼児の守り、子の授かり、乳もらい等で信仰されている保育地藏尊や水かけ地藏尊などがまつられています。

不動明王像



巾下古墳群

薬師寺から北へ行くと、いちよう通り（元十六メートル道路）と呼ばれる道に出ます。目の前に小山（ふつう「ハゴカ山」）が見えます。この山の南側から南東側にかけて、四つの古墳がならんでいます。



一号墳と二号墳は南東にあり、大きい方の二号墳は直径約一六メートル高さ約一・五メートルの円墳で、古墳時代の後期のものと思われます。

今では、山林の中に石室の岩石といわれるものが残っているだけです。

三号墳は、丘の南側にあり、直径約一八メートル高さ三・五メートルの円墳で、古墳時代の後期のものです。円墳の南側が道路で削られています。その他はほとんど完全な形で残っています。

四号古墳は、丘の南側にあり、直径約一八メートル高さ二・五メートルの円墳で、古墳時代後期のものです。円墳の西の一部は削られ小道になっており、上には牛小屋があります。このように、ここでは四つの古墳がかたままって造られているのが一つの特色です。

新加納小休本陣

市役所から那加の街をすぎ、西へ行つたとこ

ろに、那加新加納町があります。この町のほぼ中央部に、火の見矢倉があります。この北側の辺りに、小休本陣（梅村屋）があつたといわれます。

新加納村は、中山道宿駅の加納宿と鶴沼宿の中間にあり、宿駅ではありませんが、各務原台地の西の端にある交通の要所でした。また、中山道の「道筋が「カギの手」」になっており、軍事上の要所でもあつたことがうかがえます。

加納と鶴沼の宿駅まで一六キロメートルもあり、休憩所が必要などころから宿ができ、身分の高い人が休息するための場所として、ここに小休本陣ができたのです。

本陣は、宿駅に置かれるもので、もともと小休本陣では泊まれませんでしたが、やがて武士たちの中に泊まるものができ、利用されることもあつたようです。また、旗本坪内氏の接待の場所とし

ても利用されたといわれます。

梅村屋の隣に、一里塚（新加納）がありました。明治以後とり壊され、そのあとを表わす標柱だけが南側にあります。

各務郡新加納村略図



少林寺

一里塚の標柱を西に進むと、今尾医院の前の三き路に出ます。ここを左折し、すぐ右折すると竹やぶがあります。ここを過ぎると、少林寺の稲荷堂の前に出ます。

新加納の少林寺は、東陽英朝が開いた名高い寺

です。東陽英朝は、臨濟宗妙心寺派の名の通った僧で、八百津町和知に生まれ、後に京都の妙心寺、大徳寺などを経て、尾張の端泉寺に移り、その後、美濃国内に多くの寺を開いた人です。そして、永正元年（二五〇四）に、七七歳のときこの寺でなくなりしました。本堂のうらには、その塔所（墓）があります。

この寺には、東陽英朝に関する宝物が多く残っておりませんが、愚堂国師の讃（画）に題して画面中に書かれた詩・歌・文のある頂相（神宗の高僧の肖像、縦九五センチメートル横四六センチメートル）



頂相（市重文）

トル）や、著書である公案（神宗の悟りをひらくように課題として出される問題）三巻、なくなるる問題）三巻、なくなるる三日前に書かれたと伝えられる辞世（死ぬ前に残す詩）などはその代表的なものです。



公案（県重文）

少林寺の門前には、稲荷堂は、この寺の八世（八代目）住職、豊州和尙の時に建てられ、それ以後百数十年たつたままでも、太くて丸い柱や美しい彫刻など、当時の面影を伝えていきます。本尊の稲荷大明神は、文化元年（一八〇四）に京都の伏見稲荷から移して安置されたものです。

この寺は、織田信長が岐阜城を攻めたときの戦いで、建物のほとんどが焼けてしまいました。そ

いません。

手力雄神社

少林寺を出て、一里塚の標柱のところまで戻り、北に見える小山をめざして新加納駅や高山線を超えてさらに進むと、歩道橋のある県道に出ます。これに沿って北に進むと、左手に墓地の見える信号に出ます。そこを西（左）に約二〇メートル進むと、手力雄神社の鳥居が見えて来ます。次にあげるいくつかの点について、この神社のことを調べてみたいと思います。

〈由来について〉

この神社にまつられている神は手力雄命です。神話の天の岩戸の話で、天照大神がお隠れになつていた岩戸を外からこじ開けた力もちの神様と

の後、領主坪内氏が、領内の寺を調べて少林寺の旧跡を保護し、代々の菩提寺（葬式や供養をする寺）としてから、坪内家の墓や位牌や系図などが保存され現在にいたっています。

坪内家の墓は、一族の代々の墓を集めたもので、旗本の墓としては代表的なものです。

また、当寺には、坪内氏一族の各家について、明治時代に七家の系図をもとに平島の坪内高国が



旗本坪内家墓所（市史跡）

編集し直したものがあり、坪内氏のいわれを詳しく知ることができます。ただ、市の文化財に指定されておられ、大切に保存されているため、一般には公開されて



手力雄神社の鳥居

しても知られてい
ます。

平安時代にま
められた「美濃国神
名帳」に載ってい
る「真幣明神」

が、この神社では
ないかと考えられ

ています。それは、手力雄神社の真側(本殿の北)にある山の中腹に真幣岩と呼ばれる大岩がありあ
がめられていたこと、古くから伝わっている樺の
標木に「真幣明神」と書かれていたことなどから
そのようにみなされているのです。

「美濃国神名帳」ができる少し前に、「延喜式神明
帳」が作られています。この中に飛鳥田神社、加佐美
神社、村国神社、村国真聖田神社、御井神社の名



手力雄神社本殿 (市重文)

この神殿には、
たくさん彫刻が
ありますが、「竜
の雌雄」は、神
殿の左右に置かれて
おり、色はあせて
いますが、するど
い顔つきをしてい
ます。

作った人は神殿を再建した大工の棟梁樋口太
兵衛であるといわれますが、はつきりしておりま
せん。

前は載っていますが、なぜか手力雄神社または真
幣明神の名はみあたりません。けれども、この神
社は、少くとも一〇世紀中ごろの「美濃国神明帳」が
作られたころにはあったことがわかり、相当古く
から那加地区を中心に尊びあがめられていたとい
えます。

明治一二年に那加地区の総氏神として郷社の格
式を与えられました。江戸時代の記録にも「更木
八か村総鎮守」と書かれており、そのころにはす
でに、総氏神として那加地区の民衆からあがめら
れていたことが分かります。

〈本殿と竜の彫刻〉

本殿は、流造りの檜皮葺(屋根をヒノキの皮で
ふいたもの)で、延宝二年(一六七四)に再建さ
れており、三百年の風やあらしにたえ、ほとんど
傷んでおりません。



竜の雌雄 (市重文)



〈織田信長禁制〉

この神社は、織田信長と深い関係があります。
信長は、手力雄神社を敬い、この神社に千三〇〇
ヘクタールの田畑を寄付したといわれています。
そのころ信長が出した禁制では、「悪坊狼藉陣取、
放火、竹木の伐り採り」を禁じています。
水禄一〇年(一五六七)は、信長が岐阜城を攻



織田信長禁制 (市重文)

め取った年です。この禁制は、手力寺が、信長の軍勢の乱妨・陣取などの行為から逃れるため、制札代金(判銭)を支払うのと引き替に求め、信長から下付されたものです。

この禁制の文のはじめに「手力寺」と書いてあるのは、手力雄神社の名に関連して、今も残っている文書の中で最も古い記録です。これは昔、神と仏とを区別せず、お寺とお宮が同居していた時代のものです。普通は、その場合、お寺(別当寺)の方に力があつたようです。手力雄神社が手力寺となっているのは、その現われたと考えられます。

なお、境内には、信長が稲葉山城(岐阜城)攻

めにあたって、戦勝祈願で弓矢を射掛けたと伝えられる信長弓掛桜があります。今のは、元の木の芽を育てたものですが、昭和六〇年、市の文化財に指定されました。

(狛犬)

この狛犬は、天正九年(一五八一)と刻まれた石造の立像で、開口(阿)、閉口(吽)の両方ともに口を水平にしてあごをあげ、前足を垂直にして立ち、体を斜めに立て後ろ足をあげています。鬘の毛は肩まで垂れさがり、丸く脚を突き出して、全体に柔らかな曲線をみせています。これは、東大寺南大門

手力雄神社狛犬 (県重文)



の大狛犬と同じ流れをくむ様式ともいわれます。両方ともほとんど壊れておらず、像の高さは約四〇センチメートル、前より尾まで約三五センチメートルあります。

(手力雄神社境内古墳)

この古墳は、丘を背に社殿を狭んで東西に一つずつあります。南に口を開いて石室が出ています。現在、市内にある横穴式石室をもつ円墳のよい例です。横穴式石室は、六世紀に入って全国に分布した古墳の造り方です。

西古墳の盛り土は、直径一八メートル、高さ約四メートルで、石室は大きな岩で組まれています。入口から奥の壁まで一〇・五メートルで、これが石室と羨道(通路)とに分かれています。通路の幅は一・五メートルで、高さが一・八メートルあります。

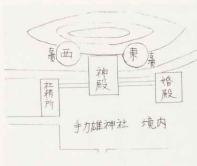
東古墳の盛り

土は、直径二二メートル、高さ五メートルで、石室内部に土が崩れ落ちており測定ができません。入口の幅は、

一・五メートルで、高さが二・二メートルあります。外形はほぼ完全な形で残っています。

手力雄神社内には、他にも数基の古墳があります。これららの石室の中から、金環、銀環、勾玉(ほとんどの馬環で作られている)、管玉(竹管を切ったような形をした、長さ一センチメートル、直径五ミリメートルのものや、長さ三センチメートル、直径八ミリメートルのものがあり、ほとんどが

手力雄神社東古墳 (市史跡)





手力雄神社西古墳 (市史跡)

碧玉(みどり色の玉)製のものである。)や、須恵器(古墳時代後半期以降の副葬品で、青灰色や灰鼠色をした飲食用の容器)です。それには、

坪、高坪をはじめ、椀、埴輪、甕、平瓶、提瓶、腰などいろいろな形のものがある)などの副葬品が出土しています。これを死者の前に並べたのは、土器に盛られた飲食物を供えるためであったと思われまます。

このように、それぞれのむらには神社があります。その神社の多くは、後ろに山があり前が平地で開けている場所や、小高い小丘(古墳のある丘)た。

柄山古墳

手力雄神社を出て北に進み、境川を渡つたところから北の方に琴が丘団地が見えます。この団地の東の端のすぐ北側に小さな山があります。そこが柄山古墳です。また、その向こうの山腹に尾崎団地も見えます。

この古墳は、前方後円墳で、小さな山を利用して、その西の端の上部に造られています。

前方部は西を向いた造りになっており、四世紀ごろに造られた古墳と考えられています。

昭和三二年ごろ、小山のまわりが削り取られ、

(など)上に

作られています。このような場所に神が宿ると信じられていたから

でしょう。そこに自分たちを見守ってくれる氏神をまつたと考えられます。

各務原市では、明治時代に入って、まわりの村の氏神を代表する総鎮守として、五つの郷社が定められました。このうち、手力雄神社と加佐美神社(若宮八幡社とも呼ばれた)は江戸時代の初めごろから総鎮守として村々からあがめられていました。また、加佐美神社、村国神社、白山宮、村国真墨田神社、村国南宮社、御井神社は、「延喜式

小山の形が大きく変わりましたが、

古墳の主要な部分は、ほぼ完全な姿で残っています。

この古墳の長さは約八二メートル、後円部の横幅は五四メートル、高さが約八・四メートルあります。後円上部は平らで、約一〇メートルの円形になっています。

前方部と後円部との間は、後円の中心から一九メートルの所で、後円部より約三・五メートル低くなっています。この部分の盛り土の幅は最も狭く、約三八メートルで、高さ約四・九メートルあります。



柄山古墳

手力雄神社東古墳 (市史跡)





栢山古墳出土鶏頭埴輪（市重文）

また、後円部の
後方には、幅約二
メートルの堀があ
り、後円部のすそ
には、三段の石が
幅約三・五メート
ルずつあったよう
です。

この古墳から鶏の頭部を形どった動物埴輪が発見されています。この鶏頭埴輪は、頭と首の一部で、直径一〇センチメートルほどのものです。

これは、市の歴史民俗資料館に展示してあります。

まとめ

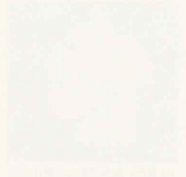
旧中山道に沿って古墳を中心になすねながら、東は貞照寺をスタートし、西は栢山古墳にいたるまで、各務原市を東西に見学しました。

このコースの主題は「旧中山道と古墳をたずねて」でした。市内にはどんな古墳があり、どんな場所に造られ、どんな形や大きさをしているかについて、おおよその内容をつかんでいただけなことと思います。古墳の丘の上に立って周囲を見回し、その大きさや造りを実際に見ることにによって、古代豪族の力を実感することができます。

たどったコースにある神社、仏閣、宿場町など、時代がまちまちの旧跡をたずねたため、歴史の流れとしてはつかみにくかったかも知れませんが、

それぞれの時代のそれぞれの文化に直接触れることができたことと思います。

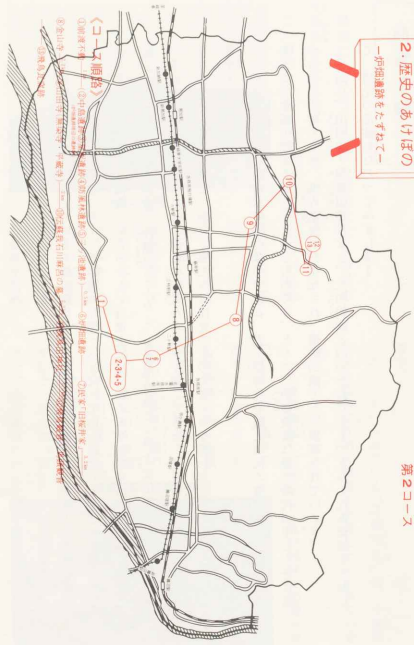
現代のようすと比べたり、当時の人々の立場になって、どっぷりとその雰囲気浸ってみながら、各務原市の発展の跡をたどってみることは、決して無駄にならなかったことと思います。



2. 歴史のあけぼの
 ー戸畑通船をたずねてー
 戸畑通船の歴史は、江戸時代から明治時代にかけての長い歴史を有している。この通船は、江戸時代から明治時代にかけての長い歴史を有している。この通船は、江戸時代から明治時代にかけての長い歴史を有している。

第2コース

2. 歴史のあけぼの
ー戸畑通船をたずねてー



各務原市の中心部を占めている各務原台地ができたのは、今からおおよそ五〜六万年も前のことで、洪積世（約一〇〇万〜一万年前の期間）とよばれている時代です。日本をおおっていた氷河時代が終わりに近づくころから、台地上には、草や木がしげり出し、石器を使う人間が住み始めます。その後、沖積世に入ると、各務原台地では縄文文化が栄えました。それだけに、各務原市には、原始の時代から祖先が残してきた、貴重な文化財が数多くあります。そのひとつひとつから、私たちは祖先のものの考え方や感じ方をとらえることができます。

このコースでは、各務原のあけぼのである、先土器時代や縄文時代の遺跡をたずね、当時の人々の生活の様子を探ろうというものです。とくに、炬燵遺跡は縄文時代の中ころを代表する県の史跡であり、竪穴式住居が復元され、遺跡公園として保存されています。さらに、山田寺・飛鳥田神社など、大和朝廷とのかかわりをもつとみられる史跡をとおし、祖先の足跡をたどってみましょう。

前渡不動

最初に訪れるのは、市の南部にある前渡の矢熊山（八七・五メートル）です。



矢熊山全景

ま」として名高く、古くから土地の人たちに親しまれ、毎日お参りする人々にぎわっています。また、山の上からは、清流木曾川を始め

濃尾平野が見わたせ、景色のよい所としても有名です。ここにまつられている「不動明王」は、千葉県にある真言宗成田不動尊の分身だといわれています。

「仏眼院縁起」によると、江戸時代に前渡を支配していた、旗本坪内家の内分家である坪内嘉兵衛（前渡坪内氏）の家臣であった、山本軍八郎の子ども秀之助が眼病のため失明しました。そこで成田山にお祈りしたところ治ったので、その恩返し

前渡不動への登り口





空から見た伊畑遺跡公園

伊畑遺跡

また、矢熊山の中腹には、鎌倉時代に起きた承久の変(一二二一年)で戦死した人たちの、供



承久の変の供養塔

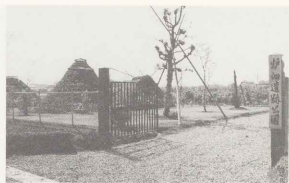
ためにお祈りの場をここに開いたのが始まりだと伝えられています。明治二四年には、京都から豊臣秀吉の祈願所であった仏眼院の寺

養塔(市史跡)が多数あります。承久の変とは、鎌倉幕府の将軍の血筋が源氏の正統三代で絶えた時、後鳥羽上皇が政権を幕府側の北条氏より取り戻そうとしたことから起きた戦いです。その戦場の中心が摩免戸(今の前渡)の瀬で、木曾川をはさんで十数万の軍兵が京方の西軍と鎌倉方の東軍に分かれて戦いました。西軍方は戦いに負け、後鳥羽上皇は隠岐へ島流しになりました。この戦いで亡くなった人々を弔うために、あちこちにまつられていた五輪の供養塔は、矢熊山に集められ、現在も土地の人によって手あつく供養されています。矢熊山の上の方で、刀や槍が発見されたこともあります。矢熊山の上の方で、刀や槍が発見されたこともあります。私たちに当時の戦いをしのばせてくれます。

各務原台地で原始時代の人々が生活していたことを物語る遺跡群を通り抜けながら、果道園・江南線を北へ進むと、伊畑遺跡を示す立て札があります。そこを右へ曲がり、東へ約二〇〇メートルほど行くと、鶴沼三ツ池町の伊畑遺跡に着きます。伊畑遺跡は、ただ遺跡があるだけでなく、縄文時代の住居を復元し、遺跡公園になっています。



名鉄各務原線……二十軒駅より徒歩15分



炉畑遺跡公園の入口

この堅穴式の住居は、住居跡の柱穴の数や大きさから柱の数や太さを考え、木のまたを活用する原始的な骨組みの方法で柱を組み立て、カヤで屋根が葺いてあります。



に発掘調査が始まりました。

この発掘では、地下にうずもれている住居跡を探し当てるためのトレンチ（試験掘りの溝）を作る段階で、完全な形をした土器が発見されました。地面の上の方からは、縄文時代の終わりのころの

昭和四二年の土地改良事業で、表面の土をならしたところ、たくさん土器のかけらが出て来ました。さらに翌年の秋には、炬の跡らしいものまで発見されました。このことがきっかけとなって縄文遺跡のあることが分かり、昭和四三年一〇月

土器が見つかり、下の方からは、縄文時代中ごろの加曾利E式土器など、多数の土器が出て来ました。

そこで、調査は昭和四六年秋まで五回にわたって続けられました。



炉畑遺跡

その結果、縄文時代の中ごろから終わりにかけての住居跡は、一〇基あることが分かりました。また、土器のかけらをつなぎ合わせたところ、完全な形のもの

が二七個もでき

その結果、縄文時代の中ごろから終わりにかけての住居跡は、一〇基あることが分かりました。また、土器のかけらをつなぎ合わせたところ、完全な形のもの

また、土器のかけらをつなぎ合わせたところ、完全な形のもの

二七個もでき

この炉畑遺跡はちょうど各務原台地のほぼ中央にあります。金網の垣根に囲まれた公園内に足を



竪穴式住居のほね組

入れると、い
まから数千年
も前に戻った
気持ちになり
ます。縄文時
代の人たちが、
家の中から、
今にも顔をの
ぞかせそうな
気がしてきま
す。

ヤの屋根をふいた
ものです。
住居の中へはた
き火が持ちこまれ、
床の中央部には石
で囲んだ炉が作ら
れています。また、
家のまわりには、
幅一〇〜一五センチメートルぐら
いの溝穴が掘られ、
大雨が降っても家の中へ水が流れ込まないように
する工夫もしてあります。

住居跡のようす



縄文時代の住居は、洞くつや岩陰から、しだいに竪穴式住居といわれるものへとかわってきました。

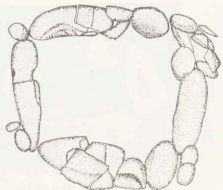
この住居は、地面を数十センチメートル掘り下げ、そこへ穴を掘って柱を数本立て、その上にカ

なかでも、第一号住居跡は円形をしており、方形である他の住居跡に比べて特に大きく立派なものでした。また、大変多くの遺物が出て来ました

し、種類も豊富でした。このようなことから、第一号住居跡は、その他の住居跡とは、少し異なった性格をしていたと考えられます。たとえば、作られた時代のちがいにによるものかも知れません。大きさから「村の支配者の家」とみる考え方は、短絡的な考え方です。

この住居の
跡から出土
器の中には、
加曽利E式土
器をはじめ、
縄文時代の中
ごろの特色を
もった土器が
たくさんあり
ます。

第二住居跡の炉の実測図



この住居の
跡から出土
器の中には、
加曽利E式土
器をはじめ、
縄文時代の中
ごろの特色を
もった土器が
たくさんあり
ます。

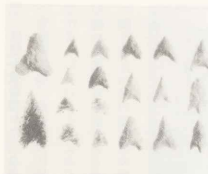
炉畑式土器（高さ33.5cm）



なかでも珍しいのは、キャリパー状深鉢で、左の写真のような特別な形をしており、全国でも数少ないものといわれています。
この土器の口もとの模様は、竹べらや爪でひっかいて付けたり、木に巻いた縄を回して付けたりして、模様の付け方に工夫を凝らしています。土器の厚さは薄くて、色は赤かっ色をしています。



吊手土器（高さ13.5cm）



黒曜石などのやじり

この深鉢は、住居跡から見つかっていることから、食料を蓄えるの
に利用して
いたと思われ
ます。

特徴のある
炉畑だけの
形や模様
の付方から、
この土器は、
特に「炉畑式
土器」と名づ
けられました。

また、この家からは、吊手土器が完全な形で出てきました。これはひもを懸けてつるせるようになっており、獣の油や燵のススも付いていました。これらことからみて、ランプとして使った道具と考えられます。

この遺跡全体から出てきたものとしては、土器の外に石で作った鉄・斧・包丁・おもり・釣り針（石匙の一種ともみられる）・皿などがあります。特に、この遺跡からは、黒曜石でできている鏃や、そのかけらが多数出土しています。黒曜石は、岐阜県内では産出せず、最も近い所では、長野県の和田峠が産地です。このことから、すでに縄文時代には、少くとも黒曜石をめぐって、長野県諏訪地方と各務原との間に交流があったと考えることができそうです。

出土した石器で最も多かったのは、五・二五グ

ラムの石のおもりで、四四〇個もありました。近くの川で魚をとるのに使った網のおもりだと考えられています。

また、土で作られた耳かざりや、呪いに使ったとみられる土の人形土偶などのかげらも出土しており、当時のおしゃれや呪いの様子さうかがうこともできます。

さらに、どんぐりの実が多く出て来ていることから、当時の人々が食料として食べていたとみることもできます。

以上のことから、縄文時代の人々は、自然の中で原始生活を行っていたわけですが、案外、多くの生活用具を作り使っていたことがわかります。

しかし、重い病気やけがをした時は呪いに頼るしかなく、各務原のように海から離れた場所では塩が手に入りにくく、生活は不便で苦しかったよ

うです。当時のような、狩りや漁をし、自然生えの物を探ることなどによって食べ物を与えるくらしは、現代の私たちが想像するよりは、はるかに不安定で大へんだったと思われれます。

炉畑遺跡は、炉の跡の焼け土を調べた結果、紀元前二千七〇〇年（今からおよそ四千七〇〇年前）ころの遺跡ということがわかり、昭和四九年、岐阜県の史跡として指定されました。

なお、炉畑遺跡から出土した土器や石器は、那加桜町の各務原市歴史民俗資料館に展示してあります。

炉畑周辺の遺跡

前渡不動から炉畑遺跡にいたる途中にある県道関・江南線の西側には、航空自衛隊の基地があり



炉畑遺跡の周辺図

ます。道路の東側は畑や竹やぶやクリ林になっており、大昔の面影を今も残しています。この一帯は、上図の

器などが発見されています。星塚遺跡は、各務原台地の南端にあり、現在は畑になっています。そこからは、縄文時代の中ころの土器や、石のおもり、鉄斧、鎌などが出て来ました。

先土器時代の石器



ように各務原台地の先土器時代（土器を使用する前の時代）や縄文時代の遺跡があちこちに分布し、埋蔵文化財が多く含まれている所として知られています。

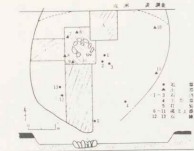
本市における先土器遺跡は、鶴沼の星塚、植野、嫁振、それに蘇原の六軒などにあり、ナイフ形石

その中でも、ナイフ形石器の出土は、各務原市にとつて、特に重要な意味をもっています。ナイフ形石器は、チャートのかげらに手を加えて作られたものですが、これは、東京の茂呂遺跡で発見された茂呂形ナイフとよばれる石器と同じ形のもので、約一万六千年ぐらい前のものであると考えられています。したがって、このナイフ形石器の発

見によって、各務原台地でも約一万六千年前ごろには、すでに、人間が住んでいたことが分かります。

なお、この外の先土器時代のものには、蘇原東門から出土した有古尖頭器や、東島から出土した石槍などがあります。

さらにこの付近には、縄文遺跡がたくさんある



防風林遺跡

ことでも知られています。上述した遺跡の外に、中島防風林、三ツ池、西之野、二十軒などの遺跡があります。いままでに発掘されたのは防風林遺跡だけです。

民家「旧桜井家」

炉畑遺跡公園の北向かいに、市民俗資料館があります。

この建物は、すぐ近くにあった旧桜井家の民家で、市の民俗文化財に指定されています。

旧桜井家は、明治四年（一八七二）に建てられましたが、濃尾大震災（一八九一）で倒れ、明治三十二年に再建、修理され、昭和五一年（一九七六）

金山寺

市民俗資料館になっている「田桜井家」から国道二一号线まで戻り、そこから中央町の中央中学校、各務原市農協を目のしるしに行きます。

農協の北隣の道路に立つと、北方約二〇〇メートルの所に、こんもり木々のしげった小高い丘の上に金山寺（各務西町）が見えます。

同寺には、市の指定した文化財の十一面観音像があります。これは、ナタ彫りに特徴がある円空仏です。

円空は、寛永五年（一六二八）羽島の上中島村の農家に生まれ、若いときに家を出て、尾張国（愛知県）や伊吹山で修行したと伝えられています。そして、名古屋の荒子観音寺で数百軀の仏像を

作り、速く北海道にも渡って仏の教えを広め「今釈迦」といわれた人です。

「円空は、貧しい人々の生活に入り込み、すすんで話をしたり、不幸な人や病める人をすくって歩いたといわれます。また一方では、一二万軀の仏像彫刻を祈願し、一生仏像作りを力を入れました。円空がどんな経緯でこの寺に立ち寄ったかは分かっていません。

立像であるこの観音像は、丸木を縦に二分し、平らな部分を像の背とし、木の外側で丸味のある部分を像の正面とする、円空独特の形式を採っています。またそれは、ナタとノミを使って彫ったものであるだけに、素材な中にも荒ら荒らしさと力強さを感じさせてくれます。さらに、その優しい顔つきはだれもが親しみやすく、みんなに愛される仏像といえます。

正面から（高さ六七〇、幅二〇）



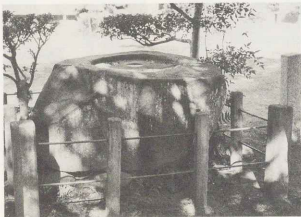
円空 仏

側面から（厚さ一三〇）



山田寺

旧山田寺の塔心礎（塔の土台石）



各務の金山寺の北側には、県道那加・各務原線（字ヶ瀬街道）が東西に走っています。歩いて三

○分ほど(バスは、太田線駒場(太田線)蘇原)西へ進むと、蘇原古市場町の信号交差点に出ます。そこを横切り、南の路地に入ると旧山田寺の寺跡と考えられる蘇原寺島町につきます。

旧山田寺は、寺伝によると、「乙巳(ひし)の変」(大化改新のきっかけとなった事件)で手柄をたてた、後の右大臣蘇我倉山田石川麻呂が、大化五年(六四九)にはじめて建てたものといわれています。

この旧山田寺はその後焼けてしまいました。その名残りをとどめるものとして、塔心礎とその付近から出て来た古瓦があります。

塔心礎は、現在、臨濟宗無染寺の中庭の南側にあります。これは、西側の竹やぶの中にうずもれていたものを、現在の場所に移したものです。塔心礎の上には直径八五センチメートル深さ四一七

ために使われました。この「舍利信仰」は、インドから中国、朝鮮へと広く流行し、日本にも、飛鳥・白鳳期にはすでに伝わっていたとされています。奈良・平安時代にかけて、おびただしい数の仏舍利が中国の唐から伝わりました。

一方、無染寺の裏手の畑より、旧山田寺のものと考えられる鵝尾瓦の一部が見つかりました。

この瓦は、金堂の大屋根の飾りに使われたと考えられ、鳥の羽根をかたどっています。一部といっても、高さが五七・四センチメートル幅が三五四センチメートルもあり、大人がやつと持ち上げられるほどの重さであることなどからして、旧山田寺はかなり大規模な寺院であったと想像されます。

さらに、旧山田寺の付近から、多くの古瓦が採集されています。これらの瓦も白鳳時代のもので

センチメートルの柱穴があり、その真中には舍利容器を入れる穴が掘られています。

この塔心礎とその穴から発見されたと伝えられている舍利容器は、ともに国の重要文化財に指定されています。舍利容器の佐波理製有蓋鏡(銅・鉛・錫の合金で作られた蓋つき鏡)は、現在の山田寺に保存されています。釈迦の死後、その火葬骨の仏舍利を供養する「舍利信仰」が生れましたが、舍利容器は仏舍利を塔心礎の柱穴に納める

塔心礎に納められていた舍利容器
(高さ13cm、口径10.3cm)



あり、その特徴をよく表わしています。

なかでも大きな、鵝瓦は直径が一七・五センチメートル

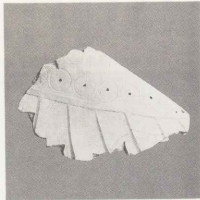
ルもあり、その蓮の花の模様である蓮華文は、川原寺式のもので貴重

なものとい

古がわらの一つ(鵝瓦)

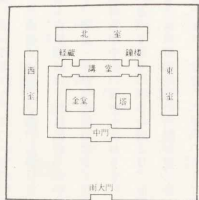


旧山田寺跡から出土した鵝尾瓦



えます。採集されたこれらの古がわらは、市歴史民俗資料館に展示されています。

以上述べたような塔心礎や古瓦の出土地点から考えると、当時の条里制の基本が方一町(約一〇九メートル四方)であることから、旧山田寺の寺域は少くとも方一町はあったとみることができそうです。この考えて当時の寺域を推定し、現在の塔心礎の場所を位置づけてみると、寺域の南



白鳳時代に流行した法起寺(奈良県)式伽藍

東端に無染寺や大神宮があたります。したがって、塔心礎の発見された場所はそれよりもやや西になります。また、この推定寺域には、現在の山田寺は入らないと考えられています。

山田寺跡と推定される場所から南西約二〇〇メートルの地に現在の臨濟宗象辨山山田寺があり、その境内には県史跡に指定されて



現在の山田寺境内西部に残る礎石群

いる山田寺礎石群があります。

以前は、この礎石群も白鳳期の山田寺の遺構と考えられていましたが、現在の推定地と離れすぎていること、この礎石群の範囲ではほとんど白鳳期の瓦の出土例がないこと、地形上の立地が異なっていることなどから、現在の山田寺礎石群は、白鳳期の山田寺のものとは異なっていると考えるようになりました。

平蔵寺は、山田寺跡の東方約六〇〇メートルの地点にあり、蘇原熊田町に入っています。

戦災によって旧本堂は焼け、現在は仮の本堂が建てられているだけですが、いまでは無住となり、地域の集会所として利用されています。

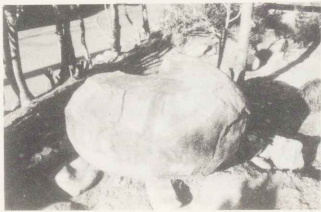
その本堂の前に、むかしのまま礎石が残っています。大きさは直径七〇センチメートルぐらいですが、いまでは割れて半分だけが残っています。そ

の中央部には、やはり深さ二〇センチメートルほどのくぼみがあります。

この付近にはいくつかの同じような礎石がありました

が、岐阜や那加方面へ運び出され、いまではひとつしか残っていません。

この平蔵寺付近からも直径一五センチメートルほどの鏡瓦が出ており、布目瓦などと合わせて白



平蔵寺のこわれた礎石



飛鳥観音 この裏手が瓦葺跡群

本殿は昭和六一年に再建されました。現在の飛鳥田神社は、江戸時代の中ごろまでは古市場村の地内に入っており、鬼門大明神と呼ばれてい

ました。古市場の鬼門の方角（北東）にあることからそのように呼ばれていたのです。それが「延喜式神明帳」の神社名にちなんで飛鳥田神社と呼び名を替えたのは寛政時代（二七八九—一八〇一）のことです。各務原の式内社とされている神社についてみると、それまで別の名前と呼ばれていたものが、江戸時代の中ごろから急に式内社の神社名を使うようになり、これは、国学が発達し式内社などの知識が神主や村人に知れわたると、自村の神社の社会的地位を高める目的で、地名などと結びつけられそのなものを式内社にあてはめていったものと考えられます。ともかく、飛鳥田神社が各務郡にあったことは確かであり、水万元年（一一六五）六月付の文書には、神祇官（全国の神社を統括していた役所）

っている官立の神社のうち最も位の高かった正三位飛鳥田神社があります。現在の神社は、団地に周りを削り取られ、境内の草木は無造作にしげり、すっかりさびれていきます。お参りする人も少なく昔の面影はありません。

最近では、蘇原飛鳥の周辺地域でも、山を削り似ているといわれます。古代史学者の門脇禎二氏の調査によると、日本全国には、アスカとつく地名が三〇か所ほどあるそうです。（蘇原のアスカも含む）



蘇原の飛鳥

見えてきます。ここが蘇原飛鳥町です。この地は、その地名の示すように奈良の飛鳥地方によく

住宅団地が開発され、まわりの緑がほとんど消えています。そうした、新しい飛鳥地区の姿を横目に見ながら、この地に残っているいくつかの歴史の足跡をたどってみたいと思います。各務原住宅団地（蘇原清住町）の入り口にある小山の上に、各務郡の式内社（二〇世紀に作られた「延喜式神明帳」）に載



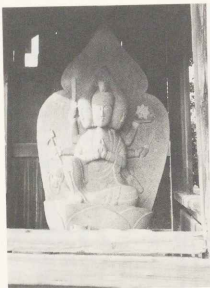
復れた正三位飛鳥田神社

に年貢を納めていた神社として、美濃国では南宮社と阿須賀社の名が出てきます。阿須賀社とは式内社や帳内社（美濃国神明帳）に載っている神社の名からみて、飛鳥田神社のことと考えてもよいでしょう。この「永万文書」に載っている神社は諸国の名神大社が多く、少なくとも永万年中には飛鳥田神社も栄えていたとみることが出来ます。ところが中世末に入ると、蘇原九か村惣社を名のる、古市場村の八幡宮（明和二年へ一七六五）に加佐美神社と改名申請に押されざびれてしまいました。その理由は不明です。

飛鳥田神社と道路を挟んで、西側には飛鳥観音があります。北山の突き出した尾根の先端の小高くなつた所にあり、飛鳥地区が一望できます。ここから飛鳥地区をながめると、奈良県の飛鳥地方にある甘樫丘からながめる風景ににているという

冥福を祈る人々は、この観音がすべての悪を滅ぼしてしてくれることを願つたものです。

飛鳥観音の裏の竹やぶ一帯は、飛鳥瓦窯跡群として知られています。ここからは布目瓦が多くみつかつており、旧山田寺跡から採集された布目瓦によくにているところから、そのかわらを焼いた窯跡ではないかとみられています。



飛鳥の馬頭観音

人もいます。観音堂内には、江戸時代前期の作とみられる木造の観音立像がまつられています。地元の良い伝えによると、織田信長に焼かれた京都六角堂の観音像をこの地にお迎へしたということでした。

参道の入り口には、左右に馬頭観音と地藏菩薩があります。江戸時代の人々は、神社や寺院の外にさまざまな信仰のあとを残しています。現在でも人の多く集まる所や人通りの多い所には、石で造られたこれらの仏像が片隅にひっそりと残されています。

飛鳥地区の馬頭観音は、高さ七六センチメートルの穏やかな顔つきの合掌像で、頭の上には馬頭が付いています。馬頭観音信仰は、馬が農作業や交通機関の動力として盛んに使われ出した、江戸時代中ごろより急に広まってきたようです。馬の

ま と め

このコースでは、炬燵遺跡と蘇原の旧跡を中心にとどりました。

特に蘇原の古市場の周辺は東山道の道筋にあたり、白鳳期の寺院跡や式内社の飛鳥田神社・加佐美神社があり、奈良副のあとも古地図で確認することが出来ます。

また、伝蘇我倉山田石川麻呂の墓という「宮塚」、奈良の「やまだでら」と同じ字の「山田寺」を始め、大和のアスカと同じ地名の「飛鳥」や古代のミヤシロと関係のありそうな「宮代」など、古代の飛鳥・白鳳文化期の政治の中心地であった奈良県飛鳥地方と何かいわくのありそうな固有な名詞が、蘇原地区にはたくさん残っています。この

市内を通る東海自然歩道の周りには、大昔の遺跡が数多く見られます。美濃須衛古窯跡群では、奈良時代から平安時代にかけて、須恵器の生産が行われました。これらの窯跡の中には、今まで発掘の行われたものもあります。

歩道の西側には、自然植物が見られます。ミカワバイケイソウ、シテコブシ、サギソウ、リンドウなど、たくさん植物が残っており、昔ながらの自然が保たれています。

目を周囲の農村に向けてみましょう。時代が下って近世になると、郷土の農村文化を代表する歌舞伎や狂言の興行が、村祭のときに盛大に行われました。各務には江戸時代の終りごろに建られた農村舞台が今でも残っており、毎年一〇月の村国神社の祭礼には、子ども歌舞伎が行われます。

では、このような興味の尽きない東海自然歩道を歩きながら、少しなりとも、当時の雰囲気直接肌で触れてみたいと思います。

伊木城

最初に訪れるのは、鶺鴒沼の南西部にある、木曾川に面した伊木城です。鶺鴒沼第一小学校の西例の道路を南へ行くと、山が目前にせまってきます。

この伊木山の北西部には、大きな配水池が造られています。また、山全体を利用し、勤労者屋外活動施設「いこいの広場 伊木の森」が設けられ、山のふもとの東側には、市少年自然の家があります。

この山頂に築かれていたのが伊木城です。伊木城については、古い時代に書かれた書物によって少しずつ異なった話を伝えており、どの話が本当かははっきりしませんが、その主なものを整理すると次のようになります。

① 伊木山は、古くは恵方山・小仏山と呼ばれていたとされ、伊木清兵衛が住むようになったから伊木山と名を改めたという説―「尾濃葉業見聞集」

② 城主を伊

木長門守正

久といい、

野武士の襲

撃を受け、

反撃して一

たんは追い

詰めたもの

の、激戦の

末討死した

とする説―

「美濃雑事記」

犬山側から見た伊木山



③ 城主は香川七郎右衛門尉正久であったが、

武馬七郎左衛門尉常旗に襲われ討死した。その後、常旗の家臣である小野木某が城を守っていたのを、正久の子の忠次が、親の仇として攻め滅ぼしたとする説―「美濃国故実記」

④ 伊木清兵衛は、本名を忠次といい香川長右衛門または長兵衛と名乗っていたが、池田信輝に仕えていて伊木城を攻め落とし、その功によって姓を伊木に改めたとする説―「濃陽志略」・「美濃国古蹟考」

これら四つの説をみると伊木氏が先か伊木城が先かはつきりしませんが、それぞれの説のつじつまが合うようにつないでみると、まず香川正久が城主として伊木山におり、それを武馬常旗が奪い取り、さらにそれを先の城主の子の香川忠次が攻め滅ぼして返り咲き、伊木清兵衛と名乗ったとみ

ることができそうです。

また、「信長公記」によると、織田信長が美濃の斎藤氏を攻めるとき、斎藤方の宇留摩城（鶴沼城に同じ）と猿啄城（坂祝にあった城）に対抗するため、伊木山に陣を敷いています。

この城跡は、明治のころには東西一メートル南北八メートル余りの石垣が残っていたようですが、太平洋戦争中に取り壊され、現在では、四すみに四角の石が置かれ、中央に丸い石が残されているだけです。

伊木山の城主の宅地はオカコイと呼ばれ、戦前には堀で囲まれ二町歩（二ヘクタール）の広さがありました。この堀も現在はなくなっています。

伊木城は、南側に木曾川があり、尾張地方二帯を見渡すことができる高台にあります。東の方には、大山城・鶴沼城を、西の方にははるかに稲葉

山城（岐阜城）を眺めることのできる、軍事上、重要な場所にあったのです。したがって、一たび戦いが起こると、奪い合いのまににされました。

名勝木曾川



大山顔首工

伊木城をあとに東へ進むと、頭首工北側の十字路につきます。その先五〇メートルのところに、国定公園と東海自然歩道の標識が立てられています。

標識の案内をじっくりみますと、この

名勝記念碑



辺りの名所旧跡を一目で知ることができます。

ここ鶴沼地区と大山市の間を流れる木曾川は、大小さまざまな岩がみられ、水の流れの変化も激しく、大河のほとりに古城がみられるヨーロッパのライン川の風景にたとえられ、日本ラインと呼ばれ親しまれています。昭和六年に文部大臣から国の名勝地に指定されました。

また、この一帯は飛騨木曾川国定公園の指定もうけています。対岸には国宝大山城を望むことが



犬山橋から見た旅館街

大山橋の北の端、城山のほとりに、道路に沿って立てられています。

この景勝地を見ようと全国から観光客が集まります。大山鶴岡の盛んな時期には、遊覧船がどつとくり出し、鶴沼町周辺の旅館はたいへん繁盛します。

この辺りの木曾川は、承久の変、織田信長の美濃攻め、関ヶ原の戦いの幕あけ等、歴史の上でも

でき、別名、夕暮富

士と呼ばれる伊木山から見た景色は格別すばらしく、空と山と水の色が織りなす自然の美を見ることができます。これらの

指定の記念碑は、

重要視された所です。

この辺りを舞台に戦いに明け暮れた戦国の将兵たちも、時には、この景勝地を眺めながら彼れをいやしたかも知れません。

城山

城山とは、「名勝木曾川」の碑のそばに切り立っている岩山のこ

とです。碑の所からは全体を見ることができませんが、大山橋を南に渡ると、城山全体が眺められます。

この城山は、志水山、

城山の全景



村国真墨田神社

城山をあとに、県道大山・各務原線（旧国道四一号线）を北へ進みます。国鉄高山本線を横切り左（西）に折れると、村国真墨田神社に着きます。

正面にある鳥居の右側には「郷社村国真墨田神社」と書かれた石柱があります。郷社というのは、明治時代につけられた神社の格式で、鶴沼地区一帯の惣氏神というような意味にあたります。現在は郷社という格式が廃止され、代わりに岐阜県の神社庁が独自に定めている、金幣社（庁長が参る指定神社のことで、主に旧社格の国幣社・県社の全部と郷社の一部が含まれている）という肩書になっっています。

また、鳥居の左右には、この神社のために寄付

石頭山とも呼ばれ、南は木曾川に接し、東も北も絶壁で、西側だけがやや緩い坂になっています。

このあたりに鶴沼城が築かれていましたが、その中心場所となっていたのがこの城山です。ふもとに土塙と堀の一部が残っています。

鶴沼城主が大沢氏であったことは、いろいろな古い記録の一致するところですが、城主の名前や落城時期について書いてあることは、それぞれの史料によってかなり異なっており、正確なところは分かりません。ただ、大沢治郎左衛門とか大沢和泉守などと名乗る武将が、城主でいたことは確かかなようです。

鶴沼城が落城したのち、一族のある者は徳川家の旗本になり、またある者は武儀郡の洞戸村の百姓になっており、洞戸には今でも子孫が住んでいます。



社名碑

した人の名前と金額を刻んだ石柱で玉垣が作られており、この神社を信仰している人がたくさんいることがわかります。

鳥居をくぐると、イチヨウやカシの大木が目に入ります。特に、カシの大木は、神木としてあがめられ、御幣がかけられています。

この神社は「延喜式神明帳」に載せられている官社の村国真墨田神社とされていますが、戦国時代の終わりごろから江戸時代の中ごろには、村国南宮社と呼ばれていました。戦国時代の終わりごろまでは、

神木



今の「御旅所」の場所にもありました。鶴沼の船頭がしからであつた河村惣六が、援助して今の場所へ移したつたといわれ、その時の棟札が神社に残っています。

その他、豊臣秀吉が河村惣六に木曾川・飛騨川両川での材木の諸権利と、馬五疋を諸役免除で使う権利を保証した印判状や、鶴沼城主大沢正次が奉納したとされる村正の銘の入った太刀があり、宝物として大切にされています。

っています。

大安寺川

村国真墨田神社の西五〇〇メートルのところに大安寺川が流れています。そこに架かっている乗師橋、鳥居之本橋などを渡って西側を北へ進みます。

村国真墨田神社の全景



拝殿の内部

境内には、いろいろな建物や碑などがあります。お宮にはつきものの神馬・護国神社・日清・日露戦争の戦死者名碑・正一位稲荷大明神・相摸の土俵などです。

稲荷大明神の鳥居わきにはのぼりが立てられ、家内安全、地球平和などの文字が見られます。

この神社の祭りは、一〇月一五日に行われていますが、現在は一〇月の第二日曜日に行われるようになっています。

祭りの日の午後には餅投げが盛大に行われます。神輿が町内をねり歩き、市内でもにぎやかな祭りの一つに入

中川と大安寺川の交わった地点に立ち止まると、いくつもの立て札が目につきます。これは大安寺川の上流にある名所旧跡の案内や諸注意のため立てられたものです。

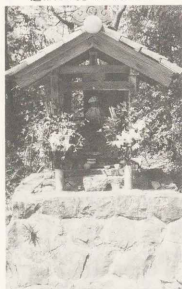
が道端に立てられています。その説明が碑の裏面に細かくびっしりと刻まれています。碑の足もとには、記念碑を作った当時の削岩機のアとが、いくつもの丸い穴跡となっています。

この辺りは、ゆるい坂道になっています。道幅が狭く、道路の両側には草木がしげり、昔の山道の面影を残しています。そのため、西側の丘の上



濟北参道改修記念碑

道ばたに見られる地藏堂



に、つつじが丘団地のあ
るのがうそのようです。
特に、東側は昔ながら
の様子をよく残していま
す。道の脇に見られる地
蔵堂には、今も花や水が
供えられています。

この地藏堂の近くに東
に入る小道があります。

舗装された道



東海自然歩道案内図



中山道と大安寺川の交差する点

川にそって少しさか
上った、新興住宅地に
はさまれた辺りでは、
今なお昔ながらの田舎
の風景が見られます。
さらに北に向かって
進むと、西側に大きな
古墳、団地の高台など
が見えてきます。間も
なく分れ道になります
が、そこにあるのが弘
法堂です。

この場所は、木曾川
からちようど二キロメ
ートルで、日乃出不動
までの道のりのほぼ半

中山道鶴沼宿説明板



山にそって五分も進む
と、濟北参道改修記念碑

分にあたります。
左の道に入ると中山道
鶴沼宿の説明板が立てら
れていますので、ひとと
おり読んでから進むと便
利です。

車折神社、日乃出不動の分かれ道の道しるべ



大安寺川の流れ





僧鉄船の五輪塔

その道が南へ折れる所の山手に椿の木があり、その根本に僧鉄船の五輪塔があります。

僧鉄船は、姓を後藤といい、

鶴沼の出身の人ですが、後、京都多福院の開山となりました。

刀剣の目貫造りや庭造りで知られており、「飯山水譜」の著者で、一説には京都龍安寺の石庭の隠れた作者という説もあります。明応元年（一四九二）に亡くなりました。

新池

地蔵堂のある道までもどり、北へ少し行くと、新池が見えてきます。

この池は、名古屋藩（尾州藩に同じ）の家老であった田宮如雲の計画で、太田宿の福田太郎八が築きました。

田宮如雲は、鳥羽・伏見の戦いの後、京都市中総取締として兵を組織しましたが、そのとき、東春日井郡の大庄屋林金兵衛のひきいる義勇兵が加わりました。それを草薙隊といいます。如雲が太田の警備を命じられたとき、草薙隊を編成替して、二四八名の大砲も使う大きな農兵隊にしました。

このとき、フランス式の軍事訓練をするかたわ

この時作られた新池は、農業用溜池として重要視され、改築されて、今日まで鶴沼の農業と多くの人々の暮らしを支えてきました。池のほとりには、それらのことが書かれた碑が立てられ、休憩する場所も作られています。

大安寺

新池のすぐ北側に大安寺が見られます。丘にありますので、参道がのぼり坂になっています。参道の手前には、いろいろな石地蔵や南無阿弥陀仏の碑が見られます。

参道の左側には、この寺を建てたいわれを書いた碑が立てられ、右側にはずらりと並んだ信者の寄進の碑が立てられています。

大安寺は、美濃国守護であった土岐頼益が建て



新池全景

ら、隊員を使って各務野の開墾を計画し、殖産興業をはかります。そのため、の用水用貯水池として新池を築いたので、用水も引かれ、水も流れましたが、用水溝の地質がやわらかく、水もち

が悪いため、水田開発は失敗に終わりました。

明治四年（一八七二）の廃藩置県で草薙隊は解散しました。その折、隊員には野を二町歩（二ヘクタール）と金銭を分け与えたといわれます。



石地蔵

た寺で、開山は笑堂常訴和尚です。笑堂は高僧として名高く、応永一八年（一四一一）に亡くなりました。その後、天皇より円応大機神師という号をおくられました。



いわれの書かれた落慶香爐

大安寺を出て、次の目的地に向かいます。この辺りの道路は、整備が行き届き、自動車道、歩道と分けてあるところもあります。

途中、左側に光生山百度不動明王の碑が見

られます。その奥には信者の集会所もあります。右側には、この辺りから日乃出不動まで、どこどこに休憩所が作られており、そこで疲れをいやすことができます。

車折神社

間もなく車折神社が見えてきます。鳥居の横に「進学、就職、その他試験に志す方々に」と書かれた立て札が立てられています。

鳥居をくぐって進むと、「御石枕」の説明書が立てられており、健康と安眠を授かることができると書いてあります。

白龍奇妙電神ののぼりが立てられている所からさらに進むと、武能神社もあり、いろいろな願いをもった参拝客のあることがわかります。



車折神社の全景

車折神社の祭神は清原頼業で平安時代後半にでた名高い学者です。清原家は代々儒学者の家として知られていましたが、とりわけ頼業は秀才として知られていました。

頼業の死後、京都天龍寺内に墓が作られました。一説に、後醍醐天皇が大堰川へ御幸し、行列が墓の前を通りすぎたとき、牛車が進まなくなり、牛が倒れて車輪を折ったので、帰ったのち車折大明神の神号を贈ったといわれています。本社は、京都市右京区嵯峨朝日町にあります。パンフレットによると、鶴沼の神社は約三〇年前にそれをまつたものとされています。

神社の本殿まで進むと、御礼のために供えられた石が山積になっ

ているのが見られます。石にはいろいろな学校名が書かれており、合格祈願や合格のお礼にお参りした人の多いのがわかります。

お礼の積み石



日乃出不動

日乃出不動は車折神社の北隣にあります。近づくにつれて、前に立てられた赤いのぼりがはっきり見えてきます。その数は多く、ちよつと見ただけでは数えきれません。寄進した人の住所が書か



入口に見られるのほり

れ、一宮・名古屋、遠くは京都の文字まで見られます。この日乃出不動は、美濃三不動の一つに数えられています。大安寺の芙蓉和尚がこの地で修行し、不動尊に折ったのが始まりとされています。境内にある「供養塔建立の趣旨」にはそのことが詳しく書かれています。その一つに次の歌が紹介されています。

済北に たずねきて見よ 日乃出滝

むすぶ心は すずしかるらん

この歌のいわれも書かれています。

本堂前には、縁香やロウソクの絶之間がありません。病気が治るようにと、商売が繁盛するよ

うにとかいった願いで参

る人が多く、東京方面からわざわざ参る人もいます。

最近では、年配の人たちだけでなく若い人も多く参るようになり、多いときは三〇〇人もの団体客があったり、時には三〇人ほど籠り堂で宿泊することもあります。宿泊がけると、中には奥の院にあたる追間不動へお参りをする人もいます。



本堂の横には、滝にうたれて修行する場所の行場があります。夏は涼しくてよいとしても、冬の行ともなると大へんです。また、夜おそく修行する人もいて、午前一時ごろ滝にうたれ、その後

にお経をあげます。

滝の横手や裏手には、

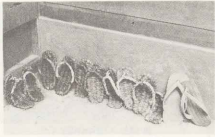
たくさんのお碑が立てられています。また、不動の前の山にも数多く見られます。これらの碑は、ここで修行し、

亡くなった人たちのものです。この土地の人は

ばかりでなく、遠くの人のも多くあります。毎月二十八日が命日になっています。



修行した人たちの石碑



行をする人たちのぞうり

車洞古窯跡

日乃出不動を北へ進み、多賀坂峠を越えるところ、車洞古窯跡につきま

す。

この窯跡は「美濃須衛古窯跡群」の一つ

に入り、今から一〇〇年ないし二〇〇年ぐらい前のものとみられています。



山はだをよく見ると、ところどころに黒ずんだ土がみられます。当時の焼き灰が土になったものです。そこから小さな破片が顔を出しています。

この古窯跡は、まだ十分に調査されていません



ちらばる土器の破片

が、まだ知られていない窟跡も相当の数にのぼるものと推定されています。しかし、新しくみつかったからといっても、勝手に掘ることは文化財保護法できびしく禁止されています。



車洞から山中不動へ

車洞からの東海自然歩道は、ここで、西に向かつて寒洞池に通じるコースと、五〇メートルほど南にもどり、そこから西に進んで山中不動へ通じるコースとの二つに分かれます。

山中不動

どちらの道も山道（林道）です。道の両側にはいろいろな落葉樹がしげり、つたや藤がからみついています。道には木の枝がおおいかぶり、夏は緑の、冬は小枝のトンネルを作っています。この辺りは、境川がようやく川らしい姿を見せるところです。川の両岸は、土と砂と小石がいろいろ混じった土のため、水の流れで削り取られた赤茶けた地はだを見えています。ところどころに、「防砂林」の標識が立てられ、木をきったり、土を掘ったりするのを禁止し、土地が荒れないよう保護しています。

車洞からの林道は、途中から広い舗装道路になります。

山中不動への道は、このコースのほか、「おがせ池」から約一〇分ほどのコースがあります。

この山中不動には、次のような伝説があります。今から一〇〇年ぐらい前（八六〇年ごろ）に、九州の人が、諸国めぐりの修行に出て各地を回っていました。そのうち年老いて、この山の岩穴に住居にしながら修行を続けていました。死ぬ間際に、不動明王の石像を刻み、誰にも知られないで死んで行きました。

それから、何百年も年がたった後、大正時代の初めに、愛知県一宮市の人が、この土地に来て、たまたまこの石像を見つけ家へ持ちかえろうとしました。ところが、その石像を持つと、なぜか一歩も歩くことができないうえ、仕方なくそのまま置いて帰りました。その話を一宮市の人たちが聞き、その石像には何かいわれがあるにちがいない

と考えられるようになり、みんなでその石像をまつることになりました。

この話を知った地元「洞地区」の人たちは、一宮の人たちと協力して、岩穴を掃除し祠を建てました。それ以後、現在もこの山中不動は、その信者たちと洞地区の人たちが世話を続けています。特に七月二七日には、地区の人みんなでおまつりをします。

山中不動の全景



この山中不動がある場所は山の北側の中腹であり、山水も多く、滝もあり、この滝にうたれて修行する人もいます。参拝する人が参道の両側に立てたのばりには、各務原市を始め、名古屋

屋市・一宮市と書いたものが多くあり、北海道の札幌市・関西の尼崎市など遠い所のものも見うけられ、信者が広い地域にまたがっていることがわかります。

春の樹木のみどりと桜の花の美しき、夏の涼しさ、秋のもみじなどレクリエーションの場所としても親しまれています。

寒洞池

車洞からも一つのコース、北の方を通る東海自然歩道は、山中不動へ向かう道よりは少し細く、曲がりくねっています。坂を上りきると、急に視界が広がります。そこが寒洞池です。

寒洞池は、各務の北山・御坊山の間を流れるいくつかの谷川の水が集まり、自然の池を作っています。

を元どおりの立派なものに造り直しました。

しかし、明治四〇年の大日照りでは、この池の水もすっかり干かれました。農家の人たちは、池の下の方にいくつかの井戸を掘って、昼も夜も水をくみあげ続け、どうにか稲の枯れるのを防ぎました。

その後、貯水量を増やすために、たびたび「池さらえ」をしたり、堤を丈夫にする工事を行い、このため池を大切に守ってきました。

つぎの文は、この池とは直接関係ありませんが、大正五年に、この近くの須衛村の人たちが、水田に水を入れるときのために作ったきまりです。

(平易な文に改編) そのころの農家の人たちが、どれほど水を大切にしていたかがわかると思えます。

「谷水には限りがあり、猥りに水田を増やすと

ましたが、今から百年ほど前に、近くの農民たちが、この池を「ため池」にして米作りの水を得るため、一番南に堤を築き、水をせき止め大きな池にしました。はじめ、この堤は幅が狭く高さも低いものでしたが、下の方で水田が新しく開かれるにつれて、高さも高く丈夫なものになっていきました。

しかし、明治二四年の「濃尾大地震」によって、この堤は壊れてしまいました。

農民たちは、自分の家も壊れましたが、米作りのためにというこで、力を合わせてすぐに堤



寒洞池、北側の山すそはゴルフ場

必ず水不足になることはわかっていている。

それで、今回みんなで約束することにした。

灌漑水申合規約

一 小字井坂の水は、全区を流れる谷水の源であり、管理する必要がある。

二 新しく田に開墾するのは、通常田と三日田の二つとする。

三 新しく通常田を開こうとする者は、一反(約一〇アール)につき五円から五〇円までのお金を、その年の二月二〇日までに区長に納め、その次の年より九か年間は、毎年三円から六円までのお金を、一月二〇日までに納めることとする。

五 納めるお金の範囲は、区長・組長・議員などが立ち会って、その田へ見に行き定めるものとする。

八 三日田を開く場合には、その年の初めに区長へ届け出ておき、毎年夏至より二十十日までの間は、どんなときでも三日間降雨がない場合には水を田に入れてはいけない。
九 前条によつて三日田を開き、一年から五年たつて、さらに第三条の届け出と手続きをすれば、通常田とすることができると。
(以下略)

昭和になつてからも、この辺りは、大きな川が無いために、いつも水不足に苦しめられました。昭和十三年に、県の補助で池を深くし、堤も前より丈夫なものにしました。昭和二十三年には、堤からの水漏れを防ぐためにコンクリートで固めました。その後たびたび工事を行い、よりたくさん貯水できるように努力しています。現在、この池の水を耕作に利用している水田の面積は約八ヘ

クタールです。
また、この池の水は、洞地区の小さな水路を通つて、それぞれの家の近くを流れるように作られ、農

家の近くを通る水路



洞古墳

寒洞池を南に進むと洞地区(各務東町)です。ここに、市指定史跡の洞古墳(洞西古墳群五号墳)があります。



史跡、洞古墳

古墳がいくつか集まっているところを古墳群と呼んでいます。古墳群は、境川上流の北側に広がる山のふもとや、丘などに広く分布しています。この古墳は、全て円墳で、古墳時代の後期のものです。古墳時代の終わりごろになると、

古墳にまつられる人の範囲が広くなり、また、まつられる人の地位もだんだん一般化してきます。それとともに、古墳は小さくなり、一つの場所に集められ、農業にとつて大切な水田地帯をさけ、山すそや丘などを利用して作られるようになります。

このころの古墳のつくりは、横穴式と呼ばれるものです。ここでは、樹木や土におおわれ内部を見ることはできませんが、鶴沼の二宮神社・那加の手力雄神社の境内などでその様子を知ることができます。

洞古墳の外に、この近くでは、おがせ池の周りや須衛・船山などの山すそにも同様に古墳群が見られましたが、土地の開墾のために、だんだん壊されて、現在では非常に少なくなつてしまいました。

稲田山・会本古窯跡群

この地域の昔の人々の主な産業が農業であったことは確かですが、その外の産業として、現在はいささか確かめることのできるものに、須恵器や瓦を中心とした窯業があります。その生産場所であ



古墳・古窯跡群の分布

ったところを「窯跡」と呼んでいます。窯跡には、須恵器や焼き窯や灰まで残っている。須恵器は焼くときうわ薬をつけないため、陶器とは性質が違っていま

す。また、この須恵器は、ロクロを使って形を作ったり、焼き温度がはるかに高いということ、弥生土器や土師器とちがっています。

平安時代の10世紀に作られた「延喜式」という文献には、美濃国が須恵器の主な生産地であるとされています。その美濃国の窯業の中心地が、現在の各務原市の北部にある山のふもとで、この地域を「美濃須衛古窯跡群」と呼んでいます。

特に、現在須衛と呼ばれる地域の、稲田山・東丸山・地獄河田・東河・南屋敷・寺山・会本などの地内から、たくさん窯跡が発見されています。その中の一つが稲田山古窯跡群です。ここだけで三〇箇所ぐらゐ窯跡が見つけられています。また、会本の八幡神社境内にあるのも有名です。

この辺りで須恵器を焼き始めた時期をあきらかにできる記録はありませんが、出土遺物をもとに

して、現在のところでは、七世紀の後半から一〇世紀の間ごろまで焼かれていたものとみられています。その後は、灰色うわ薬を使って焼く灰釉陶器が美濃国の各地で焼かれるようになり、それとともに須恵器生産は急速に衰えていきました。

この辺りで多くの窯が作られたのは、須恵器の原料になる土と、それを焼くための薪を近くで手に入れることができたこと、土師器作りより高い焼き物技術をもった人々が多く移り住んでいたことなどが考えられます。



窯跡と出土品

窯跡の発見は、古くからありましたが、特に、最近の林道工事や団地開発によって発見されることも多く、土地を開発する場所があるため、発見されても記録保存という方法がとられ、

発掘調査後、実際の窯跡はとり壊されることが多いようです。文化財の保護の上からみると大へん残念なことです。狭い国土の多目的開発のためにはある意味ではしかたなく、そのために「記録保存」という方法がとられているのです。

窯跡は、許し無しで掘ったり、須恵器やそのかけらを持ち出すことは禁止され、大切に保護するように決められています。昔の人々の暮らしの様子を知る重要な手がかりですから、大切にしたいものです。

各務の舞台(村国座)

寒洞池から一キロメートルほど南に進むと、小さな川に出ます。境川の上流です。その川にそって四〇〇メートルほど西に進むと「村国神社」が

あり、その境内に「村国座」と呼ばれる「各務の舞台」があります。この大きな木造の建物は、芝居をする劇場です。「各務の舞台」は、昭和四九年に国の「重要民俗文化財」に指定されました。

舞台づくりは、江戸時代の終わりごろの慶応二年（一八六六）に、各務の庄屋であった長繩八左衛門によって計画されました。

建築材料は、村内の天野山の木を使い、住民の労力奉仕によって建てようとしたのです。しかし、八左衛門の死や国の政治が不安定だったことなどで工事にとりかかるのが遅れ、明治六年（一八七三）にようやく始められ、明治一〇年に完成しました。

この建物の大きさは、間口（横）約一六・五メートル奥行（たて）約三二メートル高さ約九メートルです。芝居をする舞台の広さは幅一二・一メ



大きな柱の組み合わせ

でむしろ等を敷いていました。左右には二階席も作られ、観客は全部で五、六〇〇人が入れます。客席から天井を見るとき、とても大きな柱が組み合わされており、この建物の大きさや、作った時の苦勞を思い浮かべることができます。また、そのころの各務の山には、このような大きな木が育っていたということも知ることができます。

などを使っていたので、窓から採り入れる光についても随分うまく工夫されています。

この「各務の舞台」が国の「重要民俗文化財」として大切にされるわけは、この建物を、こ

一メートル奥行一〇メートルあり、直径七・三メートル

の円形の「回り舞台」になっており、舞台の下で人の力によって回すようになっていきます。舞台左手の「花道」は、幅一・三メートルもあり、一流の劇場と同じ広さです。この花道の地下は、楽屋に通じるトンネルになっています。客席・舞台・楽屋・トンネルなど建物全体が、境川の川縁の自然の地形を巧みに利用し、工夫して造られています。

各務の舞台



この建物の一つの特徴は、舞台と客席が一つの建物の中に作られていることです。客席は、今は板張りですが、当時は土間

こに住んでいた農民が、自分たちで芝居（地芝居と呼んでいる）をするために、自分たちの力だけで作ったものだからです。またこの舞台を詳しく研究することによって、江戸時代の終わりごろの農村の人々の生活の知恵や考え方を知る手がかりをつかむことができるからです。

このような舞台は、そのころ日本の各地で建てられたのですが、現在では、これほど完全な形で残っているのはほとんどありません。

今のように、テレビ・ラジオ・映画などという楽しみがなかった時代では、芝居が農民にとって一番の楽しみだったのです。地芝居は江戸時代から盛んですが、そのころは、芝居をする時は臨時に簡単な小屋を作って舞台にし、観客は屋根のない野天で見物しました。雨の日でも、寒い冬でも安心して芝居が見れるようにと村人が心を合わ

せたから、こんな大きな建物を作ることができたのです。

舞台の「こけらおとし」(落成式)は、完成後五年たって行われていました。明治政府の考えとも関係はあるのですが、やはり舞台の設備や道具を整えるための費用の面での苦勞が、おくれた最大の原因だといわれています。



芝居の上演

この「こけらおとし」

では、各務村の農民が役者になり、道具係・照明係・会場係になって、一日三時間も毎日続けて上演しました。その一日三時間も大変多くの見物人がありました。いかにみんなが喜び、楽しみ、一生

懸命参加したかがわかります。

建てられてから一〇〇年以上もの長い間、土地の人々によって守られ、利用されてきたこの舞台は、今でもみんなに親しまれています。毎年秋に行われる村国神社のおまつりには、各務区を三つのグループに分けた組によって順番を決め、小学生などによる芝居・踊りなどを上演し、多数の観客を集めています。

「各務の舞台」のある村国神社は、千二〇〇年ほど前に、「村国男依」というこの地方の豪族が建てたといわれています。この豪族は、現在の各務原市東部と愛知県の葉栗郡の北部をおさめています。この神社には、「天之火明命」と「村国男依」がまつられています。

祭りは毎年一〇月一五日です。秋の豊作を感謝する「秋祭り」です。祭りの奉仕は舞台で行われ



村国古墳公園

る芝居とセットになっており、三つの組の人たちが、毎年交代で行います。一四日、一五日の両日は、村の人たちが一月以上練習した「御神楽」を神様に奉納します。

この神社の西側の山すそに「村国古墳公園」があります。小さな円形古墳がいくつも並んでいます。よく手入れされているので、古墳群の全体の様子を詳しく見ることが出来ます。

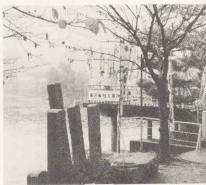
「各務の舞台」から、古い家が並ぶ道を通って東南に一〇分ほど歩くと、大きな池が見えます。

おがせ池

「おがせ池」は、名鉄各務原線おがせ駅から北へ歩いて、約一〇分のところにあります。

この池のまわりは約四キロメートルです。いくつかの伝説を持つ池です。春は池のまわりの桜と新緑、夏は池の中に咲くすいれん、秋は紅葉、そして、池の数のえきれない大小さまざま、まな鱈の名所であり、観光地としても有名です。

おがせ池



この池は、

また、信仰の池にもなっています。池の中に建つ社殿には竜王がまつられており、この神さまの信者もたくさん参拝します。

池の鯉は、この信仰と結びついて、絶対に捕ってはいけないとされています。太平洋戦争の終わりに頃から敗戦にかけての食べ物が全くなかった時でも、このいい伝えは固く守られました。参拝する人が拝殿から投げ与えるえさを奪い合う、大きな色とりどりの鯉がしぶきをあげる様子はすばらしいながめです。



おがせの鯉

この拝殿から、五〇メートルほど北に行くと、小さな橋があり、耕地整理の記念碑が建っています。この辺りは農家の人たちが作った堤です。この池は、伝説・観光・信仰の池であるとともに、農民の大切な「ため池」なのです。

六八メートル）があります。この山に降る雨がおがせ池に流れこむのです。

この辺りは、境川の上流であるために、水が少なく、農民はいつも水不足に苦しみました。日照りが続くと、農民たちは神社に「雨乞」（雨が降るように神に願うこと）をしました。須衛区では「雨乞」をしている間は、晴天でも洗濯物を外に干さなかつたということです。それでも雨が降らないと、須衛・各務区の全部の家が、長さ二メートル、直径三〇センチメートルの松明を作り、各部落ごとに集まって、太鼓や鐘をたいて、天野山に登りました。夏の太陽が西に沈むのを待って、鐘の音を合図に、松明に「斉に火をつけて」「雨乞」をしました。

天野山の尾根づいたいに山全体を縁どって夜空を染める火は、すばらしく美しく、そして、農民

日照りが続き水田の水が不足してくると、この池の水を落とすのです。この「おがせ池」の水を利用する田は、「池がかり」と呼ばれ、約五〇ヘクタールもあります。

水不足の年の田植は、この池の水を落とす日に合わせて準備します。そして、池に近いところから順番に下の方へと田植をしていきます。ですから、この「おがせ池」の世話をしているのは、「各務の舞台」の世話をしている人と同じ「各務区」の人たちです。

昔は日照りが続いて池の水がだんだん少なくなり鯉が死んだこともありましたが、このころでは田の耕地整理などで水の使い方に無駄がなくなつたので、鯉が死ぬほど池の水を落としてしまつことはなくなりました。

この池の北東に、岩はだを見せた「天野山」(二)

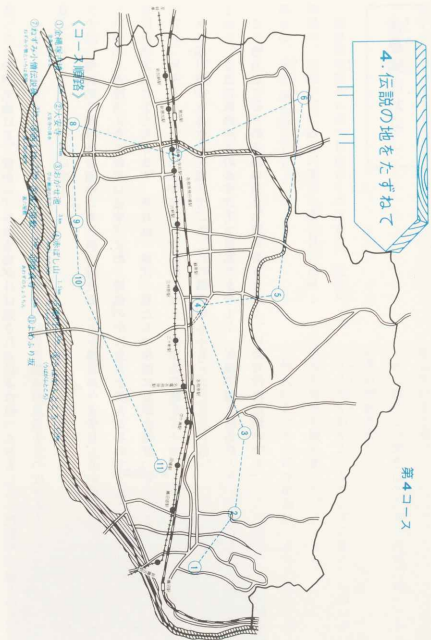
たちの水を求める強い願いとその努力をよく表わしています。

ふだん、信仰やレクリエーションの場所になっているこの池も、農民にとつてはとても大切な「ため池」なのです。

天野山とおがせ池



4. 伝説の地をたずねて



第4コース

どの土地にも、昔から、その土地だけに残されているたいへんおもしろい民話や伝説といふものがあります。各務原市にも、私たちの祖先や先人の生活をしのばせるような説話が、たくさん伝わっています。

信仰的、精神的な面からも、教えられることが多くありますし、心を豊かにしてくれるものもたくさん含まれています。また、歴史の中に生きた先人たちのすぐれた生活の知恵をくみとることもできます。それは、現代の私たちの生活にも深く結びついているからです。

ややもすると失われてしまいがちな、これら郷土の伝説を、一つでも多く、正しく伝え、受け継がれることを願って、ここに取め、紹介することにしました。

ここに取めたものがすべてではありませんが、伝説の地を訪ねたとき、これらをよりどころとして、その土地のありし日の姿をしのんでいただければ幸いです。

金鳥塚のはなし

国鉄鶴沼駅から北へしばらくのぼると、道路の西側の、周囲が畑に囲まれ鶴沼一帯を見わたせる高台に、金縄塚古墳があります。

この塚には、鳴き声を聞けば必ず幸せになれるという、金色の鳥の話が伝えられています。……

それは、ずっとむかしのことでした。ここ鶴沼の村は、川をはさんで二つに分けられ、沼に続いて田畑が広がっていました。

川のごちら側は、すぐ後ろに山がせり出していて土地もやせており、せまい所に大ぜいの村人が貧しくらしをしていました。

一方、川向ごうの村では、よく肥えた田畑からたくさんのお物がとれて、村人たちは豊かなくらし

をしていました。

ある時、この川をはさんで、田畑の境のことがら争いがおきました。

すきやくわをふりかざしての恐ろしい争いが、何日も何日も続きました。

村人にとって大切な田畑は、ふみあらされ家は焼かれ、大ぜいの人が、傷ついたり死んだりしました。生き残った村の人たちは、自分たちの土地を守るために戦い、そして死んでいった人たちのために、くす

れおちた城のあと

金縄塚古墳



に、大きな塚をつくってお祭りをしました。
—そして、いつも忘れずお祈りをしたり、だいいじにして守っていました。

「争いはおわりましたが、川のこちら側の村人たちの生活は、前にもまして苦しくなっていました。もともとやせた土地のうえ、あれた田からは、ほんのわずかしか米をとることができませんでした。ところが——ある晩のことでした。村でも一番貧乏な権兵衛さんのゆめの中に、大きな金の鳥にまたがった白ひげの老人があらわれたのです。

「——わしは、前の戦いでおまえたちといっしょに戦って敗れた霞ヶ城の城主じや。いつも山の上からこの里のようすを見守っていたが、近ごろはこの村もあられほうだいにあれてしまった。とても悲しいことじや。村人たちは、むかしのようように仕事に精をだすこともなく、毎日ぶらぶら遊んで

できるようになる。だが、その鳴き声は、どれもが聞けるわけじゃない。その声を聞くためには、毎朝早く起きる者で、しかも一日に一回は、あせを流す者でなくてはならん」

—そこまでいったかと思うと、その白ひげの老人は、スーッと消えてしまいました。

そのうち、権兵衛さんの話を聞いた村人の中に、自分がまっ先にその声を聞いて、幸せになろうとする者がでてきました。

朝早く起きて、あせを流しながら、山の草をかるすがたが見られるようになりました。あれは自分の土地から、木のかぶや大きな石をとりのぞいてあせを流す者がふえてきました。

いつか、金色のチャボの声が聞けることを信じて、村人たちは仕事に精を出し、新しく山をきり開き、田畑をふやしていきました。

不平ばかりいつている。豊かな川向こうのくらしをうらやましく思っているだけではどうにもならん。そこでじや。わしらを今までだいいじにお祭りしてくれたお礼に、わしがこの村を豊かにしてやろうと思う。

—それには、鳥の鳴き声を聞かなきゃならん。それもあふ塚の上で旧正月の元日の朝、金色のチャボが「トウテンコー」と夜明けをつけることになっている。その声を聞けば、必ず幸せな暮らしが

金縄塚よりみる城山



やがて、川向こうの村に負けないほど豊かな平和な村に生まれかわりました。

それから、だれいうとなくその山を「金鳥塚」と、よぶようになりました。

その後も、村人たちは、いつかは金のチャボの声が聞けるかもしれないというゆめと希望をもって、朝はやくから働き続けました。

大安寺の清泉

金縄塚古墳から、南を見わたすと、木曾川岸に城山が見えます。そこは、鶴沼城の城のあとです。そこから鶴沼東町ととり、大安寺川ぞいに北へのはると、八木山のふもとに、土岐氏の建てた大安寺に着きます。

大安寺には、蛇骨・香盒・茶壺・木盃・竜女解

脱物語絵巻物などが宝物として保存されています。この寺のうらの山に、一年じゅうふえたり減つたりしない清泉のわきでている所があります。

まだ大安寺の建っていない大むかしのことで、笑堂和尚という人が、今の大安寺のある八木山の岩の上（坐禪岩）で、すわっておられた時のことです。

ある夜、ふもとの方から美しい声で念仏を唱えながらのぼってくる者がいます。

見ると、若くてきれいなむすめです。和尚のすわっておられる前にひざまずいたむすめは、

「私は、おがせ池に住む竜女です。むかしは、里にでては美人となり、山に入つては山姥となり、谷川ではうわばみ（大蛇）となつて、人間や牛や馬を食い殺してきました。でも今は、積み重ねてきた罪の大きさに恐れ苦しんでいます。

どうか、和尚さんの念力（心の集中で生じる超能力）で私の罪をなくしてこの苦しみからのがれさせてください。」と、真心こめてお願いしました。

和尚も、真心もつて一心に道を求める熱心さに心を動かされ、

「もとの蛇のすがたにもどつて、私の前にあらわれなさい。そうすれば、解脱安

（苦しみや悩みがなくなること）させてあげます。」と、いわれるや、



山も谷も一度にゆれ動き、風や雨がはげしくなりました。そして、今まで和尚の前にいたむすめは大蛇となつて口から火をふいて空中へとびあがり和尚のまわりをとりまきました。一心に和尚がお経を唱え、それがおわたると大蛇は息絶えて、そのあとには、蛇骨だけがのこっていました。

解脱のできたご恩にむくいるために、約束した。清泉は、その後どんな日でのり時でも、絶えることなく今でもわきでています。

おがせ池の宝刀

池の周囲は、約四キロメートルあり、いろいろな伝説がたくさんあります。

光仁天皇の宝龜年間（七七〇年代）に、一夜のうち大池ができたと伝えられ、竜宮に通じ八大

竜王が住んでいたといわれています。池のほとりには「宝剣堂」があり、千年も生きていた大蛇からもらつたという宝刀が祭られています。

この宝刀についてこんな話が伝えられています。むかし、おがせ池の底に、大蛇が住んでいて、ときどき村里へでてきては、畑をあらし家畜を食い殺していました。ある年の夏のことで、毎日毎日

たいへんな日でありが続いて、この池の水もかれかれになつてしまひました。百姓の人たちは、とても困つて毎日繰出で雨乞い

おがせ池宝剣堂



をしました。

夜には、たい松を両手に持って、山から池のまわりへと、歩きまわりました。

それでも、雨はすこしも降りませんでした。とうとう惣八郎という百姓頭が、だいじな馬十頭と牛十頭を大蛇に食べさせようと、赤い着物を着せて、池のまん中へ連れ出していきました。

「蛇神さま。これを受けとってください。そのかわり、雨を、雨をください。」

と、一心になって祈りました。するとどうでしょう。十頭の馬がヒーンとはねあがり、後足をつっぱったまま、前足をバタバタさせたかと思うと、大つぶの雨が、ザアーといっぺんに降りはじめました。

池の水は、見る見るうちにふえてうずを巻きだしました。

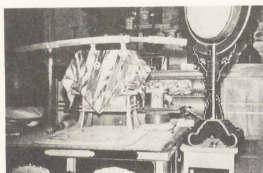
朝から百姓の人たちが、大ぜい集まってお坊さんを招き、惣八郎のためにお経をあげてもらっている時でした。

池の中から、だれやら顔をだして、こちらへむかって泳いでくるではありませんか。

みんなびつくりして、目をこすって見つめていました。

「あつ、惣八郎。惣八郎やないか。」

まちがいがなく惣八郎です。死んだとばかり思っていたのに、ふしぎなことがあるものです。



電宮出現の宝刀

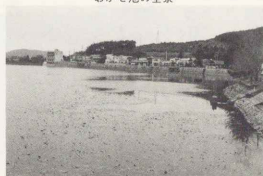
ばかんとしてい

そして、あつと

いう間に、惣八郎もろとも沈んでしまいました。

たい松は消え、暗やみにかみなり
の光だけが、矢のよう
に走りまわっ
ていました。

まる三日間、降



おがせ池の全景

り続いたあとは、うそのように晴れわたりました。おがせの池も、なにこともなかったかのように、静かに水をたたえていました。

それから三年の月日が過ぎました。

百姓の人たちは、一日たりとも惣八郎のことを忘れたものはいませんでした。

るみんなの前で、惣八郎はこんな話をはじめました。

「おらあ、あの日、眼がくらみからだがりちまって、ぜんぜんおぼえがなくなつたまんま、池の奥底へひきずりこまれたんや。『いたい。いたい。』と、うめく声に、ふつと気がつくつと、なんとまあ。足もとに、頭をもたげたのうちまわっている大蛇がいるのや。おらあ、たまげて声が出なんだ。にげようとしたけど、からだも動かん。大蛇は、おらあひびぎへきて、『ここをさすつてくれ。さすつてくれ。』と、ふくれあがつた腹をむけるんや。こわこわさすつてやった。なんども、なんども。」

すると、大きな口をあけて、苦しげに太刀をはきだしたんや。そして、やつとしずかになり、『私は、この池に千年も住んでいる主だ、あ

の日でりから、からだが強ってしまった。むかし、ずい分、村で悪事を重ねてきたので、なかなか死ぬない。おまえが村へ帰ったら、坊さんになってな。みみの力によって、私を解脱に導いてほしい。この太刀は、私のたびとつながらだがさしあげる。いつまでもだいにするとよい。私が死ぬばこの太刀は、きつと村を守ってくれるだろう。さあ、もっていけ」と、いうので、受けとると、もうからだは浮きあがり、このとおりぶじに帰ってこれたんや。」

そういうながら、りっぱな刀を見せました。

その後、惣八郎は、坊さんとなり、東谷と改めました。それから、どんな日での時でも池の水はなくなることもなく、村人たちの田や畑をうるおしているという事です。

※大安寺とおがせ池については、大安寺発行の

のぼっていくと、丸たんばをわらで囲った小さな家を見つけた。

丸たんばの台に腰をすえると、おくの方で男の人がもちをこねているのが見えました。

「だんなさん。ばたもちは、いかがですか。」

「いや、それより草もちを、おくれ。」

しばらくすると、青々したよもぎのにおいのする草もちをもって女の人がありました。

六兵衛さんは、それをちよいとつまんで、口の中に入れました。ところが、

「こ、こりゃあ。べべッ、べべッ……！」

やわらかいはずの草もちは、口の中へ入れたとたん、かたいわらになってしまったのです。

気がつくと、家はあとかたもなく消え、そのうえ六兵衛さんのもつてきた、にぎりめしまでなくなっていました。

「鶴沼名勝(竜女ものがたり)に、くわしく書かれています。

赤ばし山の立岩

赤ばし山に、木を切りにでかけた六兵衛さんは、いせよく山にむかっていきました。

木を切るなや草かりが、まやにぎりめしを、かごに入れて背おっていきました。

木を切りたおし、まきのたばをつくって、山を

立 岩



ふと、前を見ると、きつねが二匹あつという間に、しげみの中にすがたをかくしてしまいました。びっくりした六兵衛さんは、息もたえだえに走って家へもどってきました。

それから、赤ばし山では、べんとうをぬすまれたり畑のねぎなどもあらされるようになりました。

「赤ばしやーまのおこんこは、べんとうぬすん

で、どろまんじゅう。

赤ばしやーまのおこんこは、おにぎりぬすんで、わらまんじゅう。

おこんこ、おこんこ、こーんこん。」

子どもたちは、こんな歌をうたっていました。それからは、赤ばし山にはけっして遊びにいかなくなりしました。

ある日のことです。六兵衛さんが田んぼで稲刈りをしていると、弁けいを通りかかりました。お

どろいて見上げると、背も横のはばも六兵衛さんの二倍もある大男です。六兵衛さんは、弁けいに赤ぼし山のきつねたいじをたのみました。

二人が、赤ぼし山にのぼると、大岩のそばに、よろいかぶとに身をつつんださむらいが、刀をぬいて弁けいをにらんで立っていました。



池と山あし赤ぼし

そのさむらいは、弁けいよりもつとからだが大きく目ほらんんどかがやいています。弁けいは旅すがたで刀も弓も矢も持っていない。

六兵衛さんは、おそろしくなつて

松の木のうしろにかくれて、二人のようすを見守っていました。さむらいをにらんでいた弁けいは、大岩のそばにはえていたススキを一本ぬきとって、手に持ちました。そして大岩にむかって、静かに目をとじました。

それから、ゆっくり目を開き、もっていたススキで

「えいっ。」

と、大岩めがけてたたきつけました。

すると、たたみ五まいぐらい合わせたほどの大岩は、かみなりかと思うような、ガラガラッという音をたてて、まっ二つにわれてしまいました。

「ススキのほで、岩をわるとはなんと強い人よ。」

さむらいは、そう思ったかと思うと、パッとすがたをかくしてしまいました。

大岩が二つにわれたまま立っています。

とんちんかんな

殿様のお使いで、お金を持って歩いていた奴が大金をなくし、殿様に切り殺されてしまいました。

その若者のたましいが、火の玉となって橋の近くをうろうろするという。この土橋のことを土地の人々は、火の玉橋、というようになりました。

おがせ池へむかう街道の北側を、東から西へ静かに流れている境川。火の玉橋は、その境川にかかっています。

東門町への道は、今ではまっすくになり田んぼの間をはしっています。

土橋はいつのまにかくずれ、コンクリートの、りっぱな橋になり、その下で白サギが遊んでいます。

「おやっ、今のさむらいは。」

弁けいが、目をこらしてあたりを見まわすと、五メートルぐらい先を、こそこそときつねがにげていきます。

「あっはっは。このわしにはまいったな。」

弁けいはそういって、六兵衛さんに別れをつげ鎌倉の方へ向かって歩いていきました。

このことがあってから、赤ぼし山のきつねは、村人や旅人には、けっしていたずらをしないようになりました。

現在の市民会館の南に、大きな赤ぼし山がありました。

ところが、今ではとんちんかんならずらで、ぐるりとひとまわりできる小山だけになってしまいました。小山といってもほんとうに小さく、土が少しもありがっているだけです。そしてその上に、

す。この橋の北の方に、むかし五、六軒の家がありました。

その人たちは、屋根に使うかわらを焼いてく
らしていました。「須衛がわら」といって、とても
よいかわらで、そのころではお寺かお金持ちの家
にしか使われないようなものでした。

遠い京の都や、尾張の方にもそのかわらは、お
さめられるのでした。

そうして、もうけた金の中から、上納金とい
うものを殿様におさめなければなりません。

この蘇原の古市場に庄屋といつて、上納金や百
姓のつくった米を年貢として集める村役人がいま
した。

ホタルの出した夏のある日のことでした。
その庄屋の家で働いていた一人の若者が、お使い

一軒一軒まわって、やつと集めた金は、かなり
たくさん金額になりました。

「こんな大金、おとしたらえらいこっちゃ。死
ぬまで働いたって、わしらにやかせげん金や」
と、だいにふところふかくしまいこみました。

境川にかかる土橋のあたりでは、もうホタルが
とびはじめていました。

「こらあかん。おそうなつてまった。はようか
えらな、またしかられる。」

と、走るようにして土橋をわたり、いそいで帰つ
ていきました。

すっかり暗くなって、庄屋へ帰りついた若者は、
思わずドキツとして、ふところへ手をやりました。

「あつ、ない。えらいこっちゃ。上納金がない。
ちゃんと、ここへ入れといたんやに。」

まっ青になって、気がくるったように、ふとこ

として、東門の村へ上納金を集めにつきました。

若者は、この使いが一番いやな仕事でした。一
枚一枚でいいに土をねり、何日もの日数や、手
まをかけてやつと焼きあげ、遠いところまで運ん
でいっても、金持ちや役人の言いなりの、少ない
金しかもらえない

かわら焼きの人た
ちの苦勞を知つて
いるからでした。

そんな人たちか
ら、主人のいいつ
けとはいえ、また

今年もふやされた
上納金を集めるの

は、とてもつらい
ことでした。

ろをさぐる若者の
前に、奥の方から
出てきた庄屋さま

が、ぬーつと立ち
ました。

「なんじゃと。
集めた金がない
や。たわけめ。
なくしたですむ
ことやと思つと

るんか。」

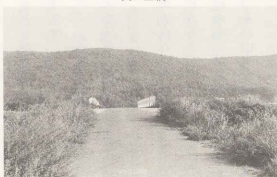
若者は、もうどうしたらよいかわかりません。
ガタガタとふるえ声もでません。

にらみつけている庄屋さまの前でただ小さくな
ってすわりこみ、土間に顔をすりつけるばかりで

した。



火の玉橋より東門をのぞむ



火の玉橋

ちようど、この日庄屋さまの家へこの上納金を受けとりに役人がきていました。

話を聞き、おこつてさしきから出てきた役人は「なにっ、集めた上納金をおとしてなくしたというのか。このふときものめ。おおかた大金に目がくらんで、お前がぬすんで、どこぞにかくしてもしたのであろう。ぬすんでおいて、な



火の玉橋よりみる尾崎団地

くしたふりをす
るとは、けしか
らぬやつじゃ」と、いきなりこしの刀をぬくと、ふるえている若者に、サツと切りつけ殺してしまいました。この若者のたま

しいが、「おれは、ぬすんだんじゃねえ。ぬすつたなんじゃねえ。落といたんじゃ。落といたんすりや、このあたりじゃが……」

と、今でもあの土橋のあたりを、ひっしにさがしまわっているそうです。だれかが近づくと、スーッと消え、人が遠のくと、また見えだすのです。ついこの間まで、子どもたちが、境川へホタルを、とりにいこうとするど、

「東門奴が出るで、一人で行くんやない。」
「銭もつていくんやないぞ。東門奴にとられるで。」

と、きまつておとなの人からいわれたそうです。火の玉橋から、西をみると、ずつとむこうに高い山がみえ尾崎団地の家々が見えます。

うばがふところは、その山すその谷あいにあります。

うばがふところ

むかし、岐阜城に、若くてりりしい殿様が住んでいました。美しい奥方様をむかえて、とても幸せな毎日を送っていました。

二年ほどすぎた夏のこと、奥方様には、かわいい赤子が生まれました。世つきができたよろこびにうちようてんになつていきますと、数方の敵が金華山にせめのぼつてきました。味方はひつ死でたかいましたが、人数が少なく、とても勝ち目がありません。

家来二人と、子守役のうばが、奥方様と赤子をつれてにげることになりました。はじめは、奥方様を戸板にのせ、うばが赤子をだいて走りまわりました。途中からは、家来が奥方様をかゝるがわる背負つ

てにげました。真夏の山の中をひつ死ににげているうちに、うばは奥方様たちとはぐれてしまいました。やがて鉄ぼうの音がして、奥方様と二人の家来が殺されてしまいました。

うばは、その場に立ちすくんでしまいました。赤子は、大きな口をあけて、今にもなきだしそうです。うばは、あわてて乳ぶさをふくませました。ところが、乳はほとんど出ていませんで、すぐにはながつてしまいます。

「若君様は、なんとしても、わたしがお守りせねば……。」
敵の速さかゝるのを待ち、また山の中を進みました。が、日もくれ、おなかをすかした赤子は、なぐばかりです。

そのうちにととうと、うばの乳は出なくなつてしまいました。何度も乳ぶさをしばつてみました



乳房が滝のそばにある祠

が、一しずくも出ません。うばは、まっ暗な山の中を歩きまわりました。

つかれば、ひざまずいたとき、水の流れるような音がしました。水がわき出ていたのです。冷たくておいしい水でした。うばは、さっそく木の葉ですくって、赤子の口へ持っていきました。すると、赤子がなきやみました。はら一ばいになるとねむってしまいました。

無事を祈りながら、赤子をねかせつけ、自分もその水をおなか一ばいのみました。ふしぎなことに、乳が出るようになりました。ふところがぬれ

ていたのです。うばは、急につかれがどつと出て、深いねむりに落ちてしまいました。

朝早く、うばは、たき木をとりに来たじいさんに声をかけられて、目をさました。うばが、わけを話しますと、

「おお、お気のどくに。村のほうは残党（ざんどう）がきびしいで、村へおりとんざつたらあかんぞな。」

と言って、かくまってくれることになりました。

こうして、うばは、村人の助けをうけながら、この山奥で、若者をりっぱに育てたということです。

それ以来、ここから出る水を飲むと、よく乳が出るようになると言われました。そして、いつの間にか、人々はここを、うばがふところと呼ぶようになったそうです。

ろからついてくるようで、足がすくんでしまいそうです。

しばらく歩き、やつとのもので明りのついた一けん家を見つけました。そこは、あつらえ向きのように、いろは茶屋^{ぢや}と書いて、小さな宿屋でした。

やれやれと思つて宿をこい、へやに案内されて、早めにねどこにはいったまではよかったのですが、雨戸がガタガタ、ろう下はみしりみしり、あんどんの明りがゆらゆら。それが、だんだん人影（かげ）に見えてきます。こわくて、ふとんを頭から引つかぶっていても、ねむることができません。ちよつととなりのへやに坊様がとまっていますので、助けをこつと、

「そりや、お気のどくなことじゃの。では、わしが、へやをかわってしんせよう。」

ねずみ小僧^{こぞう}といろは茶屋

各務原市民公園（元岐阜大学農学部跡地）辺りは、「かみ野」といって、むかしは家一けんとならない広い野原でした。

ある日ぐれのこと、野原の真ん中の一本道を、歩きつかれて今にもたおれそうなかっこうで、娘がひとり、とぼとぼと歩いていました。何やら後

と言われ、娘は安心したのか、旅のつかれが出て
ねむってしまいました。

ところが、ま夜中に娘のふところをねらってや
つてきた者がいました。昼間、娘のあとをずっと
つけてきた男で、そして娘のへやへしひのびこんで
来ましたが、なんと、そこねていたのは娘で
はなく、坊様でしたから、どろぼうのぼうがおど
ろいでしまいました。こしをぬかしてにげていき
ました。

そのうち、坊様もねむってしまいました。どれ
ほどすぎたところか、坊様はむねのへんが苦しくて
目がさめました。すると、男が馬のりになってい
ました。坊様は、ふとんをはねのけるのといっし
よに男をつきとばしてやりました。男はころがる
ようににげていきました。が、坊様の足にはかな
いません。つかまえて、よく見ますと、宿屋の主

娘は、助けてもらったうれしさを、はつきり思い
出しました。

。ねずみ小僧。が江戸で、おしおきされたと聞
いたあと、娘は「かかみ野」へやってきて、いろ
は茶屋の近くに、。ねずみ小僧の墓をたててや
りました。

今も、那加幼稚園のすぐ東側に、その碑が残っ
ています。

西入坊の蛇骨

下中屋町の河野西入坊の七代目の坊様を、行念
といたしました。情けの深い坊様で、村の人たちが
たいへんしたっていました。

ある秋の日、その日は、お座がつとまり、村の
人たちが大ぜいお参りに来ていました。途中、後

人でした。いろいろは茶屋は、宿の主人がぬすつと
をはたらく、たいへんな宿だったので。

もちろん、それからは、いろいろは茶屋はとりつ
ぶされてしまいました。

娘と坊様は、あくる朝、わかれおしみななら、
べつべつのほうへ向かって旅立ちました。

そんなことがあってから、長い月日がたちまし
た。娘は、江戸の、あるやしきにほう公していま
した。そして、そのやしきにどろぼうが入ったこ
とがありました。そのどろぼうは、。ねずみ小僧。
と言って、びんぼうな人たちに好かれていました。
娘は、つかまつた。ねずみ小僧。を見て、びつっ
りしてしまいました。ずつと前、いろいろは茶屋で
助けてもらった坊様にそっくりだったのです。

「そうじゃ。同じ人かもしれない。まちがいない。
まちがいない。でもまあ、どうしたことやら。」

ろから、美しく髪をゆつた、色白の、若い娘が、
すうつと入って来て、すわつてお参りをするので
した。坊様の説教が終りますと、また、すうつと
帰っていくのです。

二日目、三日目と、毎日、娘はお参りにやつて
来ます。

行念は、毎日欠
かさず参りに来て
くれるこの娘のこ
とが気になりだし、
そのわけをたずね
ますと、娘はいい
ました。

「二院さん、わ
たしは、きょう
限りの命でござ

河野西入坊南門



います。わたしは、生まれてから、人に迷惑ばかりかけてきました。わたしを見ると、みなしゅゆは、こわがったり、いやがったりしますので、いつもはずかしい思いばかりしてきました。どういうわけで、わたしは、こんな身になったのか、これは生まれる前に、何かとんでもない悪いことをしたにちがいない、そう思うようになりまして、それで、ご院さんにおすがりして、どうぞ極楽浄土へ参れますように、とごとお話を聞かせてもらいたいと思ひまして、毎日、こうやって……………」

「それにしても、そんなに美しいすがたをして、また、どうして……………」

と、わけがわからないので、行念がたずねますと、

「はい、そのことでございますが、こうして、ご院さんの教えを受けに参るときだけ、こんな

と、たのみます。

情け深い行念のこと、ころよく引き受けてやりました。娘は、すっかり安心して、にっこり笑

い、
「わたしは、丑の刻(午前二時ごろ)に、あなた様の御堂で、おいとまをいただきますとござい
ます。それで、多くの人が見えない間に、わたしのこの身のかたづけをしていただきとうござい
ます。」

と、いいました。

そこで、行念は、みんながねてしまつても、ひとりだけ起きていて、もうやがて丑の刻になるはずだと思つていまして、何やら、ものすい音がしました。

「ああ、こりや今、おいとまをもらんだな。」と、ひとりごとを言い、そこで、念仏をとなえ、

に美しいすがたになれるのでございます。いつもは、自分でもおどろくほどみにくいすがたで、人にはこわがられたり、さらわれたりしております。ご院さんの前に、みにくいすがたをお見せするのは罪の深いことでございます。それで、わたしの住んでおります葭池のそばの、春日の神社にお願いしまして、命と引きかえに、ご院さんのところに参るときだけ、こんなに美しい姿にしたいのでございます。七日の間だけという約束で、きょうが約束の期限の七日目でございます。」

行念は、娘のかわいそうな話を聞いて、大きなため息をつきました。
娘は、まっ黒なすんだ目に涙を浮かべて、

「ご院さん、ご院さんのおそばに、いつまでもおいていただきとうございます。」

おつとめをすませ、先ほど音のしたほうへ行つてみますと、おどろいたことに、三メートルもある大きな蛇が死んでおりました。

「ああ、あの娘は、春日神社うらの葭池に住んでいた大蛇の化身であったのか。かわいそうなことよ。生きているうちは、みんなにさらわれ、死んでからまで、人目をさげんならんとは、なんとも、あわれなことでよ。」

なおも念仏をとなえながら、
行念は、大蛇をこもに包んで始



末して、本堂のうらの納骨塔の下にうめてやりました。

行念のことですから、そのおりに、まるごとうめてしまわずに、蛇の頭だけは、桐の箱におさめて、だいに供養するように伝えてきました。まるごとうめてしまうのは、いかにもかわいそうであること。



西入坊の本堂裏にある納骨塔

せて頭の部分だけでも、そばにおいてやろうと思っただです。

それが、今も西入坊に伝わっていて、上あごと下あごの骨と歯とが、そっくり残っています。上あごの長

さは、二十センチメートルあまりもあり、鋭い歯が、いかにもどうもうな形をして並んでいます。

甚六屋敷

木曾川が、今の堤防よりも北を流れていたころのことです。後ろに三井山の続きの山がそびえていて、十けんほどの家が、山のわきにあがりました。そして、そこを山脇村といいました。

山すそに、ねこのひたいほどの田や畑があるだけで、村の人たちの食べ物は、少しの米と、少しの野菜と、それに、時たま取れる木曾川の魚ぐらいでした。木曾川の川原がひろがっていました。大きな石ころがごろごろしていて、すすきがぼうぼうしげっていましたので、耕作ができるようなところではありませんでした。

村の人たちは、みんな正直で、いい人ばかりでしたが、木曾川がはらんでもすると、食うや食わずの生活をしなければならぬこともありました。

ある夏の日のことです。

雷鳴がとどろき、大つぶの雨が降りだしました。大風も吹きだしました。すると、ついさっきまで静かに流れていた川が、ごうごうと荒れくるい、ものすごい勢いで流れだしました。

村の人たちは、水神様のおいかりだといひ、と晩中お祈りをしました。しかし、川は三日三晩、休みなしに荒れくるいました。

四日目の夜、村の人たちは、庄屋の家に集まり、「水神様のおいかりを解くには、三井山に登って、天の神様をお願いするしかない。」

と、話し合いました。話が進みますと、さっそく、たくさんのお供

甚六屋敷



から一すじの光がもれ、向こう岸の荒地の一角所を、じかっと照りつけました。あたりが明るくなってきて、雨がやみ、大風も弱まってきました。しまいは、その風もやみ、川が静かな流れにもどりました。

村の人たちは、みんな大喜びでした。天の神様に、大きな声でお礼をいいながら、山を下り、村へ帰ってきました。

五日目の朝になりました。久しぶりに、静かで平和な村にもどりました。

しかし、ふしぎなことが起きていました。前の日にちょうど最初の光がさした向こう岸の荒地に小さな小屋が建てられていて、じいさんが一人、くわで荒地を切りひらいていました。じいさんのいる小屋のあたりは、後光がさしているように見えました。

これまで見たこともないその光景に、村の人たちは、みんなびっくりしました。どこからやってきたものか、どうして荒地をたがやしているのかそのわけが知りたくて、相談の結果、庄屋が代表で、じいさんに会いにいきました。

ところが、どこから来たとも、なぜこんな荒地をたがやすのかも、何も答えず、にっこり笑っているばかりでした。



食べ物に困らないようになつた村の人たちは、だれいとうなく、甚六じいさんのことを、「天の神様のお使い」というようになりました。

それから、数年たちました。

その日は、朝から曇一つない、それはいい天気でした。庄屋が舟に乗り、村の人々のこれからの暮らしについて、甚六じいさんに相談に行きました。

庄屋は、夕べ村の寄り合いで話し合ったことを

最後に、どうし

ても名前が知りたくて、たずねます

と、

「甚六という者や。」

と、名前だけは、はっきり答えました。

働きの甚六じ

いさんは、荒地に住みついてから、三日で畑をつくり、一週間で田をつくってしまいました。そして、いもやとうもろこしや米を作り、舟までつくって、その舟に米や野さいをいっぱいつんで、村へ来ては、食べ物に困っている人に分けてやりました。

甚六裏橋



一つ一つ話しました。甚六じいさんがこの村に來てからは、食べる物には困らなくなったこと。しかし、いつまでも甚六じいさんにたよってばかりいられません。そこで、甚六じいさんの知恵を借りようということになったということを。

帰りぎわに、じいさんは、

「あした、おんさい(米なさい)。」

と、いうなり、舟に乗って、どこかへ出かけてしまいました。

その夜は、暴風雨となり、村の前の川が、久しぶりに大荒れに荒れました。

そして、次の日、村の人たちは、びっくり。きのうまで、とうとうと流れていた川が、ずっと向こうのほうを流れていたからです。それに、手前の川のとほ、聞こんしさえすれば田や畑になりそうな広い土地に変わっていました。

ふしぎなことに、甚六じいさんのすがたも、じいさんの小屋も、どこにも見当たりませんでした。村の人たちは、

「やっぱり、神様のお使いやった。」

といって、甚六じいさんのたがやした向こう岸の土地を、みんなで守る相談をしました。そして、じいさんの住んでいた小屋のあたりを、甚六屋敷と呼ぶようになりました。

あわずのちょうちん

前渡の常貞寺の前から、神置までの木曾川堤防で、やみ夜に限って見られたというちょうちんの話です。しかし、そのちょうちんを持った人の正体を見とけた者は、だれもいません。

江戸時代の終わりごろ。前渡村のとなりに、一



常貞寺前の木曾川堤防

せてきました。ところが、年ごろになったいまでは、やはり会うたびに、いや気がさしてきました。

ヤエは、そんなことも知らず、竹宗がしたわしくしてしたわしくて、思いがつのばかりでした。とある月のない、まっ暗やみの夜のことです。髪をゆい、新しい羽織をはおって、ヤエはそそくさと常貞寺の前あたりの堤の上がってきました。ちょうちんの明かりにうつるヤエの顔は、おけしよのせいもあって、いつもとは違って、それは美しくかがやいて見えました。

竹宗から、久しぶりにとどいた手紙に、水無月

人の傳が住んでいました。竹宗といって、男はれのするほどにりっぱな顔の侍でした。娘たちのあこがれのまどでした。

ところが、その竹宗には、もうすでにいいなずけがありました。

ヤエと言って、前渡村の娘で、生まれる前から竹宗の嫁にと約束されていたそうです。

それが、顔に黒いあざがあって、その上、かわいそうに、片一方の足が、少し短かったといえます。竹宗は、一たん取り決められたこの約束を、

武士の名

にかけても守りとおさねば、と自分にいいきか

東より常貞寺を望む



(陰暦六月)の十日、夜五つ半(八時)の刻に、堤の上で会おうと認めてあったのです。

ヤエは、竹宗から、今夜はきつとやさしいことばをかけてもらえるに違いないと思って、胸をはずませ、堤を西へ西へと進んで行きました。しかし、竹宗の姿は、どこまで行っても見当たらず、上中屋を過ぎ、下中屋の前のはたも通りすぎで、とうとう神置の八幡神社の鎮守の森まで来てしまいました。

「早う、竹宗様に、会わせてください。」

と、一心にお祈りをしてる時でした。カサカサと雑木がゆれ、草むらるをふむ足音がしたかと思うと、黒いふく面をした男が、ヤエの後ろに現われました。ヤエが顔を上げたと同時に、サツと刀がふりおろされました。ヤエは、ばつたりたおれはたにおいてあったちょうちんは、そのひょうし



神置にある八幡神社

にころがって、あ
かあかともえまし
た。

どれほどの日が
たったでしょう。

ヤエの親子、それ
に竹宗のすがたも
見かけなくなりま
した。

ちよどそのこ

ろから、常貞寺の前の堤を、やみ夜に限って、明
かりのついたらちよらんだけが、足音とともに西
のほうへ動いていくといううわさがひろがり始め
ました。

そして、そのちよらんは、ヤエのもので、あ
の晩、竹宗に会いたくても会えなかったヤエの熱

い思いが、ちよらんにもえているにちがいない
ということになり、だれいともなく、あわすのち
よらん、というようになりました。

よめふり坂

かみ野の、東はずれの「羽場村」に、おゆう
といつて大へんはたらき者で、親おもいの娘が住
んでいました。

天気の良い日などは、きまっておとうさんやお
かあさんと、のら仕事にせいたす、おゆうの姿を
村人たちは見かけたそうです。

ある日の夕ぐれのこと、今まで暗れていたのに
急に雨つぶがおちてきました。すると、道のむこ
うの方が、ざわざわしてきました。

「なんやろなあ。」

おとうさんが、顔を上げてみました。

「ぎょうさん、ならんできよらっせるようや。」

「おかしなことやなも。」

「よめこのぎょうれつや。よめこのぎょうれつ
や。」

と、小さな声で、弟とおかあさんがいきました。

「おゆう、顔を上げるでねえぞ。」

「なんで、おとっ。」

「なあに、キツネのよめりかもしれん。目が合
わんよっにさ。」

「キツネに見られると、ばかされるんやと。」
おかあさんまでそうです。おゆうは見たく
てしかたなかったのですが、しんぼうしてじっと
うつむいていました。よめこのぎょうれつは、お
ゆう親子に気がつかなかったように、しやなり、
しやなりと坂の下へ消えていきました。

そのころ、坂の下の尾張の国から、坂の上の美
濃の国へ、よめこさがしにきてても、なかなか話が
まとまらなかったそうです。

そのわけは、よめこのぎょうれつが、

「よーめりよー。よーめりよー。」

と、通れるような、道らしい道がなかったからで
す。やれやれ、やっと坂までたどりついたと思っ
と、かこやが、

「さかだ、さかだ。」

「なんぎじやぜ。なんぎじやぜ。」

「酒手をおくれ。酒手をおくれ。」

とわめき、だちんの出しようがわるいと、前と後
ろでかこをひどくふるのです。

それで、娘たちは、くもすけのようなかこやが
おそろしくて、坂の下の話には「うん」とは、決
して首をふらなかつたのです。



よめふり坂付近

「やっぱりなあ。
さっきのよめこの
ぎょうれつは、あ
りやー、キツネの
よめりやったん
や。」
と、おかあさんが
つぶやきました。

それから、長い月日がすぎ、おゆうもたいへん美しい娘になりました。そして、よめにくれという、いい話が、あつちからも、こつちからもありました。

でも、おゆうは坂の下に住む心がきれいで、よく働くわか者と前からすき合っていました。おと

うさんもおかあさんも、あれならよいしよいたいを持つたろうと、二人を、めおと。にしてくれました。しあわせな日が長く続きました。

ある年のこと、いつもの年よりも雨が多くて、毎日ふっていました。そうですから、坂の下の木曾川の水はどんどんふえて、川原はみなかくれてしまい、ずっとむこうまでどろ海のようになっていました。

そんな時、おゆうに年とったおかあさんの病が重いとのお知らせがあつて、おゆうが川ぶちにくとみると、木曾川は、川はばいっばいのにこり水がうずをまいて、こころうとなつて流れていました。

「はよう、水、ひいておくれ。おかあに、おかあにいたい。おかあ死んだらあかんよ。」

おゆうは、手を合わせておがみました。でも、ふきあれた雨がうそのように静まった時には、も

うおかあさんは死んでしまっていました。

そのころ、いちばんの親ふこうというのは、親の死に目にあえないということでした。あれだけおとうさんやおかあさんを大切にしておゆうでさえ、親の死に目にあえなかつたのです。おゆうは坂をうらんで泣いたそうです。川を悲しいと思いましたが、それから、いよいよ、坂道をはさんだよめりの話は、さらわれたそうです。

そんなことがあつてから、その坂のことを、だれいいうとなく、よめふり坂。とよぶようになりました。

※くわしくは、各務原市小学校国語同好会編集の

「かかみがはらのむかし話」および、「各務原市

史」(民俗巻)をご覧ください。

あとがき

この本は、小学校修了程度以上の方を対象に、新しく各務原市に移ってこられた方々はもちろん、古くから住んでおられるみなさんにも、各務原市を「ふるさと」としてよく知り、親しみをもっていただけるよう願って編集しました。そのため、大半の場合は常用漢字の範囲で書き表わし、教育漢字に入っていない文字や固有名詞、やや特殊な言葉などには項目ごとに最初に出てくるところで「ふりがな」をつけました。

ふるさとめぐりとして、それぞれのテーマにそって四つのコースが組んでありますが、この本を片手に実際にたずねてみて、郷土に生活してきた先人たちの文化・ものの考え方・感じ方などに接していただけたらと思います。私たちのふるさとに、こんなところがあったのか、こんな伝説があったのかと見直されることと思います。

この本は市内の小中学校の先生方によって書かれたものを初版として第二版まで版を重ねましたが、今回、第三版の増刷を機に、市史編さん係で、第一―第三コーヌには大はばな手を加え、内容、文章ともに書き改めました。

社会の変化にともない、新しい世代には古くから伝わる郷土文化が忘れられがちな今日、この本を読まれたみなさんが、さらに郷土への愛着を深め、文化財愛護・郷土学習へのあしがかりにしていただければ幸いです。

今回の改訂版を作るにあたって、次のような文献を基本的に参加にしました。さらに深く郷土の歴史を知りたい方は是非お読みになるとよいと思います。

参考文献

『美濃国稲葉郡志』（大正四）、『濃飛両国通史』（大正十二）、『各務村史』（昭和三十八）、『郡加町史』（昭和三十九）、『鵜沼の歴史』（昭和四十二）、『中山道―美濃十六宿―』（昭和四十四）、『各務原市の歴史』（昭和四十九）、『各務原市史（考古巻）』（昭和五十八）、『蘇原の歴史』（昭和五十九）、『明日香風』17（昭和六

十一）

改訂版 昭和五十四年七月発行
第二版 昭和五十八年三月発行
版 昭和六十一年七月発行

かみかみはら ふるさとめぐり

―歴史と伝説の地をたずねて―

発行 ©各務原市教育委員会

各務原市那加桜町一六九

印刷 きよつせい

210002051



宁波市图书馆

